

〔一般論文〕

## 1902 年、1903 年の岡山孤児院の賛助員募集活動と 全国的な支援ネットワークシステムの展開内容

中畠 洋・菊池 義昭

### はじめに

筆者等は、これまで、岡山孤児院が財政危機を打開するため 1898（明治 31）年 5 月から着手した賛助員募集活動が、2 年 6 ヶ月後の 1900（同 33）年 9 月には全国各地から 1 万人の賛助員を募集し、明治 30 年代から同 40 年代に全国的な支援ネットワークシステムを構築した実践の展開過程の実態を解明し、その歴史的役割を分析する研究を進めてきた。そして、この研究課題を次の 4 つとした<sup>1)</sup>。

（1）賛助員の設置と全国的な支援ネットワークシステムをどのように構築したか。（2）1 万人以上もの全国的な賛助員の支援ネットワークシステムをどのように運営し維持したか。（3）賛助員の全国的な支援ネットワークシステムがどのように衰退していったか。また、（4）個々の賛助員およびその賛助員と岡山孤児院の結節点となった個々の地方委員が、岡山孤児院の活動から、どのような啓蒙を受け、彼らの慈善事業に対する認識としての価値感（観）がどのように変化したかである。つまり、個々の賛助員と地方委員が、どのような考え方で同院を支援していたかを、彼らが賛助金等と一緒に送付してきた書簡を用いてその内容を解明し、慈善事業に対

する認識としての価値感（観）の在り様を分析していくことにする。

そして、前稿では、1万人の賛助員募集の目標を達成する1900年と翌1901（同34）年の賛助員募集活動の実態を解明、分析した<sup>2)</sup>。つまり、研究課題の（1）の後半の「全国的な支援ネットワークシステムをどのように構築したか」から始め、（2）の「1万人以上もの全国的な賛助員の支援ネットワークシステムをどのように運営」したかの初期の実態の解明と分析を実施した。

その結果、1900年の場合は、1月末の総賛助員数が7,303人であったところから、9月末には10,310人と1万人台に達し、12月末には10,872人となり、実質的に3,205人増加する右肩上がりの傾向が続くことが確認できた。これは、同年の新賛助員の加入者が全体で6,307人増加する一方で、退会等が2,355人あり、実質的な増加が3,205人になったためであり、新賛助員募集が積極的に実施されていた成果であると理解できた。

さらに、賛助金の集金も毎月400円台から700円台あり、最高額は12月の765円21銭で、年間合計（総賛助金）は6,695円7銭2厘に達し、同院の総収入（27,892円2銭9厘）の24%を占める重要な財源になっていたことが確認できた。

また、先の6,307人の新賛助員の状況は、岩手県を除く46道府県から加入者があり、全国的な拡大が確認でき、特に、北海道の827人が最も多く、福岡県の765人、広島県の731人、岡山県の654人と続いた。さらに、韓国、台湾、仏国、米国などの海外からの加入もあった。

これらの新賛助員募集および賛助金集金は、①本部直接収入、②職員による集金、③地方委員による募集活動、④音楽幻燈隊による新賛助員募集によるもので、①では全国からの新賛助員希望者が1,314人加入し、彼らと現賛助員より同院に直接送金された全賛助金が669円3銭となり、総賛助金の10%であった。また、②職員による集金は、宮崎利平と佐藤惣吾が岡山市内などを、宮崎兵吉郎が岡山県内などを、大西義一が徳島市で集

金活動を実施した。さらに、大阪市では、小野田鎮による 1 月から 5 月までの募集活動が目立った。また、その結果、計 2,551 円 10 銭 5 厘の賛助金と 2,637 人の新賛助員を募集する成果をあげ、総賛助金の 38.1%に達していた。

さらに、③各地の地方委員による集金活動は、当初（1900 年 1 月調）22 道府県の 73 市区町村等に 147 人の地方委員が存在したが、その後年度内に実際に活動したのは 26 道府県の 102 市区町村等の 143 人で、全体で 6,704 円 17 銭 2 厘を集め、総賛助金の 24.0%に達した。

そして、翌 1901 年は、①職員による新賛助員募集と賛助金集金、②音楽幻燈会での新賛助員募集と地方委員の依頼、③地方委員による新賛助員募集と賛助金の集金、④同院に直接入会した新賛助員と直接送金があり、賛助員募集活動の事務処理体制の強化が図られたことが確認できた。

このうち、①では大西義一と宮崎利平が東京市に駐在して、同市等で積極的な新賛助員募集と賛助金の集金等を展開し大きな成果をあげていた。つまり、岡山孤児院東京出張所を設け、東京市で本格な活動を展開し、大西は鳩山春子、三輪田真佐子、矢島楫子、潮田千勢子らを熱心に説得して東京婦人慈善談話会の開催などに努力し、東京出張所職員の地道な働きが功を奏し、全体で新賛助員を計 813 人募集し、先の新賛助と計 851 人の現賛助員から合わせて 1,177 円 58 銭を集金したため、同年の総新賛助員 1,403 人の 57.9%を集め、総賛助金 7,803 円 18 銭 6 厘の 15.1%に達する成果を挙げている。

加えて、岡山県内から関西、四国、九州へと活動範囲を広げつつ、鉄道沿線の慈善箱の設置及び音楽幻燈会での賛助員募集活動も行い、各地の状況に応じて、職員、地方委員、賛助員が連携し、全国的な支援ネットワークシステムの運営と維持を機能させていたことが理解できた。特に、佐藤惣吉と宮崎兵吉郎および草地磯吉は、岡山市と岡山県内の市町村で新賛助員募集と集金等に取り組み、入江大九郎と渡辺万吉郎は関西方面を含む近

隣県などで賛助員募集と集金を実施し、佐藤は年間計 393 円 10 銭、宮崎（兵）は計 125 円 30 銭、草地は計 81 円 13 銭、入江は計 35 円 25 銭、渡辺は計 70 円 70 銭、宮崎利平は計 11 円 40 銭を集金していた。さらに、岡山市内の集金は、佐藤、宮崎（兵）、草地が担当したようで計 841 円 25 銭 5 厘を集めたため、職員による集金合計は 2,735 円 71 銭 5 厘に達し、総賛助金の 35.1%を占めた。このため、各職員が役割分担を決めて効率的な賛助員募集活動を実施していたことも理解できた。

そして、②音楽幻燈隊での新賛助員募集と地方委員の依頼は、同隊が賛助員の少ない北関東や北信越の主要市町村などで、同幻燈会を開催して新賛助員を募集し、各地に地方委員が就任したため、賛助員の全国的なネットワークシステムが北関東や北信越などに拡大し、その拠点（結節点）が新たに計 30 ヶ所設置されて地方委員に 96 人等が就任し、新賛助員計 831 人の増加に貢献したため、同年の総新賛助員の 59.2%を占めた。

また、③地方委員による新賛助員募集と賛助金の集金は、当時 37 道府県の 144 市区町村等に 341 人の地方委員が存在したが、実際に活動したのは 34 道府県の 113 市区町村等の 156 人であった。ただ、この 156 人の地方委員が多彩な活動を実施したため、全国規模の賛助員募集活動の拡大が確認でき、地方委員による賛助金集金と新賛助員募集の体制が継続し拡大したため、合計 4,409 円 73 銭を集金し、同年の総賛助金の約 56.5%を占める最も重要な活動になっていた。

そして、④同院への直接入会と直接送金の内容は、前者の新賛助員が計 231 人加入したため全体の 16.5%となり、後者は、合計 592 円 5 銭 1 厘が送金されたため、総賛助金の約 7.6%であった。

このように、1901 年の賛助員募集活動は、各地の状況に応じつつ、職員、地方委員、賛助員が、全国的な賛助員の支援ネットワークシステムの維持・拡大を具体化し、全国規模の同システムの構築と継続がなされていくことが理解できた。そのポイントは、同院の積極的な賛助員募集活動に

よる一般市民への宣伝に加え、地方委員を含む綿密な役割分担を個々の担当者が自主的に担うという活動方式が構築されていくためと理解できた。

このため、1901 年は、昨年 12 月に総賛助員数が 10,872 人と 1 万人台に達したところから始まり、1 月末の 11,211 人から 11 月末の 13,425 人へ 2,214 人増加したが、12 月に 2,216 人の退会者がいたため同年末は 11,440 人となり、初めて総賛助員数が減少していたことが確認できた。これは、新賛助員が 1 月から 5 月に 300 人台から 500 人台であったものが、6 月から 100 人台へ減少し、7 月以降は 100 人台から 200 人台へと減少したためであった。

ただ、月別の賛助金の集金額は、8 月と 9 月が 400 円台、6 月が 500 円台、5 月と 7 月が 600 円台、4 月と 12 月が 700 円台、3 月が 800 円台、1 月と 2 月が 900 円台と 1 月から 4 月までの集金額が多く、その後減傾向となり、12 月に一時回復したため、同年総賛助金は 7,803 円 18 銭 6 厘となり、同院の歳入（29,665 円 75 銭 6 厘）の 26.3%を占める成果が確認できた。

このように、1900 年および 1901 年の賛助員募集活動は、全国的、組織的、継続的な活動がさらに進展し、慈善事業のパラダイム転換の兆しのような現象の 1 つが生まれつつあると理解できた。そして、これがさらに進化するためには、音楽幻燈隊を含む職員や地方委員の活動が鍵要因になると仮定できた。

このため、今後は、明治期における岡山孤児院の賛助員募集活動の一大プロジェクトの全国的な支援ネットワークシステムの構築と継続が、さらにどのように進化していくかを解明、分析することが課題になると理解した。ただし、研究課題の（4）の個々の賛助員や地方委員が、岡山孤児院の活動からどのような啓蒙を受け、彼らの慈善事業に対する認識としての価値感（観）がどのように変化したかの解明と分析は、いまだ不十分であることを付け加えておく。

そこで、本稿では、前稿での解明と分析を踏まえ、研究課題の（2）の「1

万人以上もの全国的な賛助員の支援ネットワークシステムをどのように運営し維持したか」に関する、1902 年と 1903 年の実態を解明、分析していくことにする。また、(2) の研究課題を具体化するための研究目的は、各年の賛助員募集活動の実態を解明、分析する最初の章で記すことにする。

## 1. 1902 年の賛助員募集活動の展開とその実態

### 1) 1902 年の賛助員募集活動の概要

#### (1) 総賛助員数と新賛助員数の推移

1901 年 12 月末に 11,440 人に達した賛助員数が、1902 年にどのように推移するかをまとめると表 1 のようになった<sup>3)</sup>。つまり、1 月の新賛助員が 157 人加入し、合計 11,597 人となったが、退員する者が 47 人いたため、1 月末の総数は差引き 11,550 人であった。また、このうち、岡山孤児院（本部）に賛助金を直接送金する者が 1,793 人で、外部運動員と地方委員等が集金する賛助員が 9,757 人と全体の 84.5% を占めたため、外部運動員や地方委員等による集金が重要であったことが再確認できた。

そして、2 月の新賛助員は 217 人、3 月 115 人、4 月 193 人、5 月 190 人、6 月 125 人、7 月 271 人と続き、8 月は 94 人に減少したが、9 月 126 人、10 月 264 人、11 月 127 人、12 月 169 人となり、毎月 100 人台から 200 人

表 1 1902 年の月別の総選所員数と新賛助員数の推移

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
前月末現在数	11,440	11,550	11,643	11,612	11,735	11,735	11,778	11,714	11,726	11,692	11,792	11,757
本月加入者数	157	217	115	193	190	125	271	94	126	264	127	169
本月加入者合計	11,597	11,767	11,758	11,805	11,925	12,050	12,049	11,808	11,852	11,956	11,919	11,926
本月退員数	47	124	146	70		* 272	335	82	160	164	162	1,477
本月末現在総数	11,550	11,643	11,612	11,735		11,778	11,714	11,726	11,692	11,792	11,757	10,449
本月一種総数	1,793	1,830	1,825	1,932		1,958	1,990	2,002	2,017	1,957	2,007	1,910
本月二種総数	9,757	9,813	9,787	9,803		9,820	9,724	9,724	9,675	9,835	90,750	8,539

〈注〉6 月の \* は 5 月と 6 月の退員数の計である。

(『岡山孤児院新報』第 64 号から第 75 号附録より作成)

台で推移し、その合計は 2,048 人となり、月平均 171 人程であった。

一方、退員者が合計 3,039 人いたため、12 月末現在の総賛助員数は、10,449 人と、1 月末より 1,101 人も減少してしまった。その原因は、12 月末の退員者が 50 人であったことに加え、「年末調査削除」として、『同院新報』を毎月送付しても住所不明などで返送された者や、賛助金の未納者を、一度に 1,427 人も削除したためであった。これにより、総賛助員数の 3 割程度が減少する一方で、新たに 2 割程度増加したため、全体的には 1 割程度の減少となり、1902 年は総賛助員数が従来までの右肩上りの増加傾向から微減もしくは現状維持に変化する分岐点となるきざしが理解できた。

そこで、本稿では、右肩上りの総賛助員数が、「微減もしくは現状維持」となる 1902 年の賛助員募集活動の具体的な内容を解明していくことにする。さらに、先の総賛助員数の「微減もしくは現状維持」は、同院を支える財政的な生命線の 1 つである賛助金の集金と同院の財政にどのような影響を与えたかを明らかにすることが重要になる。このため、新賛助員の増加と退員者が拮抗する中での 1902 年の新賛助員の募集の概要をまとめ、さらに同年の賛助金の収支が全体の収支に占める割合を明らかにすることで全体的な動向を把握し、それを基に同年の賛助員募集活動の具体的な内容を解明する課題（研究目的）を見極めていくことにする。

なお、以下の本文で、賛助員募集活動と記す場合は、新賛助員の募集活動と賛助金の集金活動を含む総称であるが、一方の活動を中心に述べる場合もあることを断っておく。

## （2）新賛助員の募集活動の概要

1902 年の新賛助員の月別の募集活動の推移は、表 1 の「本月加入者数」に示したが、その道府県別の月別の加入者（募集者）数をまとめると表 2 のようになる<sup>4)</sup>。毎月の加入者を「本部」と「地方」に分けて表示したが、

表2 1902(明治35)年1月からの各月別各府県別の新賛助員の加入人数

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		合計
	本部	地方	本部	地方	本部	地方	本部	地方	本部	地方	本部	地方	本部	地方	本部	地方	本部	地方	本部	地方	本部	地方	本部	地方	
北海道	1		1	6	2	6		1		5				4		1		1		1		1		1	31
青森県		1																	1						2
岩手県																									
宮城県																									
秋田県																									
山形県																									
福島県			1		2										1										4
栃木県			1																						1
茨城県																									
群馬県																						1			1
埼玉県																									
千葉県			3		2		1																		6
東京府	15	2	16		1		5				3	1			2		2	1					2		50
神奈川県	16		38	9	19	12	1	1	3			4	1	1	5	2							1		113
新潟県	5		2		11						5		1		3						1		8		36
富山県			1	2																					3
石川県		3	1										1	3		2				1			2		13
福井県				3	2		1											1							7
山梨県																									
長野県				1				1	1		1						2				1				7
岐阜県		1	1																						2
静岡県			1			1								8											10
愛知県								1						1					2						5
三重県			1													1					1				2
滋賀県		1	2			1								1			1				2		1		9
京都府	19		8		4	5		6	22				10	1	19		6	4	93		7		16		220
大阪府	33		31	1			8		5				4					1			3		1		87
兵庫県	28		1	30	1	3	11	4	5	12	3	8	2	4	1	6		10		36	2	24	1	8	200
奈良県	3																					2			5
和歌山県	1				1																				2
鳥取県												1													1
島根県									1								1								2
岡山県	6	5	32	17	5	11	37	25	16	1	7	1	14	11	8	3	8			7	4	2	6	20	247
広島県	3		2		9	5	4		1	1	9		11		2	6		2		1	3		74		133
山口県		2		1			1	2	3						1								1		11
徳島県	2		2										8	3			1					1			17
香川県		1	1			3	4	7					1	10									5		33
愛媛県		2		5	3	10	3	8	2	20		6		20			3				2				96
高知県																		5	44		3	17	2	5	76
福岡県		3			5		1	39	1	2	10	13	5	1		3			3		1		1		88
佐賀県				1					3																4
長崎県							3				2		1					1		1			4		11
熊本県										12	54	1	48	1	2		3		3		1				125
大分県																		1							1
宮崎県	1		1	1		1			2				1	1	7	6	2	68	7	9	36	7	6		156
鹿児島県				1										25	6	3		3		3					41
沖縄県																									
韓国															1								1		1
台湾			1			11							1												15
カナダ		5							12					4							2				23
ハワイ		1		1		31			28					59					26	6					152
総数	17	140	51	166	31	84	123	70	57	133	20	105	34	237	31	63	20	106	22	242	56	71	18	151	2048

(注) 空白は人数がゼロ、以下の表も同様である。合計は各月の本部と地方を加算した人数。

(『岡山孤児院新報』第64号から第75号附録より作成)



これは、『岡山孤児院新報』に同院自身が2つに分類して記載していたからであった。つまり、岡山孤児院へ直接郵送等で加入を申し込んだ新賛助員を「本部」とし、それ以外の職員の外部運動員や音楽幻燈隊および地方委員等が募集した新賛助員を「地方」と記していたからである。さらに、「本部」と「地方」はそれぞれ「第一種」と「第二種」に分かれ、「第一種」は毎月10銭を寄付する者で、「第二種」は毎年1回1円を寄付する者であったが、表2では両者を合算した人数を示した。

そして、1902年の道府県別の新賛助員の加入分布は、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、茨城県、埼玉県、山梨県、沖縄県以外の39道府県から合計2,048人が加入（募集）していたため、ほぼ全国各地から加入していたことが確認できた。

このうち北海道は、2月7人、3月8人など計31人であった。東北地方は、青森県計2人、福島県計4人のみで、関東地方は、栃木県と群馬県各1人、千葉県が2月に3人など計6人で、東京府の計50人と神奈川県計113人が関東地方の中では最も多かった。このうち、東京府では、1月15人、2月18人、神奈川県は1月16人、2月38人、3月28人、4月13人と、1月から4月に集中していた。

中部地方は、新潟県が3月11人、12月8人など計36人、富山県計3人、石川県計13人、福井県と長野県各計7人、静岡県計10人、愛知県計5人、三重県計2人であったため、中部地方では新潟県に加入者が最も多く、その他の県は少なかった。

近畿地方は、滋賀県計9人、奈良県計5人、和歌山県計2人と少なかったが、大阪府は1月33人、2月31人など計87人、兵庫県は1月28人、2月31人、10月36人、11月26人など計200人で毎月加入者があり、京都府も1月19人、5月28人、8月20人、10月97人、12月16人など計220人と加入者が多く、この3府県での募集活動が目立った。

中国地方は、鳥取県計1人、島根県計2人、山口県計11人と少なかった。

たが、広島県は3月、4月、6月、7月に10人前後の加入者がおり計133人となった。岡山県も毎月加入者がおり、2月49人、4月62人、5月16人、7月15人、8月19人、12月26人など計247人で、最大の加入者であった。

四国地方は、徳島県が7月11人など計17人、香川県が4月と7月に各11人など計33人、愛媛県が3月13人、4月11人、5月22人、7月20人など96人と四国地方では最も多かった。次が高知県の計76人で、10月49人、11月20人、12月7人と10月から12月に集中していた。このため、多数の加入者のあった月での新賛助員募集などの活動内容を明らかにすることが必要になると理解した。

九州地方は、大分県計1人、佐賀県計4人、長崎県計11人と少なかったが、一方で鹿児島県が7月25人、8月9人など計41人、熊本県が6月66人、7月49人など計125人、宮崎県が8月13人、9月70人、10月16人、11月43人など計156人と6月から11月に新賛助員が集中的に加入しており、この理由を明らかにする必要があった。

そして、海外からの新賛助員への加入もあり、韓国計1人、台湾計4人、カナダ計23人、ハワイ計152人と、カナダとハワイから多数の加入者があり、特に、カナダは1月5人、5月12人、7月4人で、ハワイは4月31人、5月28人、7月59人、10月26人が注目でき、この時期にカナダやハワイから新賛助員が加入した背景や内容を解明することが求められた。

このように、各道府県の月別の新賛助員の加入者数の推移をみていくと、特定の道府県の特定の月に加入者数が多く集中していることが確認できた。このため、前述したように、加入者数の多い月は、各道府県内の市町村で、賛助員募集活動が活発化したためと推定でき、なぜ活発化したかを具体的に解明することが次の課題になることが確認できた。

### （3）賛助金の収支と全収支に占める割合

1902 年 1 月から 12 月までの月別の賛助金の収支とその全収支に占める割合をまとめると表 3 のようになる<sup>5)</sup>。つまり、1 月の賛助金収入は 1,032 円 58 銭であったため全実収入（繰越金を除く）2,097 円 91 銭 9 厘の 49.2%（以下カッコ内）を占める重要な収入であった。2 月はさらに増加し 1,219 円 67 銭（36.7）となったが、3 月は 577 円 54 銭（45.9）に半減し、4 月 434 円 85 銭（32.9）、5 月 636 円 95 銭（41.2）、6 月 327 円 92 銭（10.9）、7 月 473 円 73 銭（22.7）、8 月 455 円 56 銭（23.4）、9 月 393 円 91 銭（24.3）、10 月 377 円 64 銭（10.7）、11 月 342 円 63 銭（18.5）、12 月 675 円 98 銭（24.7）と、5 月と 12 月が 600 円台となったが、その他の月は 300 円台から 400 円台で推移し、1 月と 2 月が 1,000 円台で最も多くの集金額となり、全収入に対する割合も 1 月から 5 月までは 40% 台（4 月を除く）であったが、6 月以降は 10% 台から 20% 台に減少した。

表 3 1902 年の月別の賛助金収支と全収支に占める割合

	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月
① 賛助金収入	1,032.580	1,219.670	577.540	434.850	636.950	327.920
賛助金の割合	49.2	36.7	45.9	32.9	41.2	10.9
全収入（繰越金除く）	2,097.919	3,324.387	1,258.355	1,321.984	1,546.111	3,015.469
② 賛助金集金費	98.645	164.414	50.675	36.574	98.850	53.130
同集金の割合	6.4	6.0	3.1	2.5	6.5	1.7
全支出	1,532.664	2,761.901	1,655.239	1,422.982	1,518.128	3,081.972
①－②	933.935	1,055.256	526.865	398.276	538.100	274.790
	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
① 賛助金収入	473.730	455.560	393.910	377.640	342.630	675.980
賛助金の割合	22.7	23.4	24.3	10.7	18.5	24.900
全収入（繰越金除く）	2,087.790	1,947.927	1,620.304	3,517.618	1,849.690	2,714.699
② 賛助金集金費	177.318	146.996	106.197	96.820	61.265	126.821
同集金の割合	8.5	7.8	6.6	2.8	3.3	4.700
全支出	2,077.220	1,886.025	1,620.304	3,517.618	1,849.690	2,714.699
①－②	296.412	308.564	287.713	280.820	281.365	549.159

（『岡山孤児院新報』第 64 号から第 75 号附録より作成）

このため、1年間の総賛助金収入は6,948円96銭となり総収入の28.6%を占め、月平均は579円8銭になった。これは、昨年の総賛助金収入7,803円18銭6厘より854円22銭6厘の減額となり、賛助金の収入も減少傾向にあったことが理解できた。このような減少傾向の中で1902年にどのような集金活動を実施したかを、解明することが課題となった。特に、前者の新賛助員の募集と合わせて、昨年まで実施してきた、職員の①外部運動員による集金活動と新賛助員募集および②音楽幻燈隊による新賛助員募集と地方委員の就任状況、さらに③岡山孤児院への直接の送金と新賛助員の加入内容、そして④地方委員による賛助金の集金と新賛助員の募集などの内容を解明し、賛助員の全国各地への拡大と、その拠点（結節点）となった地方委員の支援ネットワークシステムの具体化などの意義を分析していくことが、1902年の課題（研究目的）になると判断した。

なお、①の職員による賛助員活動については、その費用（賛助金集金費）が必要になり、その支出額は表3に示した。たとえば、1月は98円64銭5厘で全支出の6.4%（以下カッコ内）を占め、7月が最大の177円31銭8厘（8.5）で、最小が4月36円57銭4厘（2.6）であったことを記しておき、個別の使用までは十分に解明できないことを断っておく。

## 2) 職員による賛助員募集活動の内容

### (1) 職員による賛助員募集活動の概要

1902年1月10日の『岡山孤児院新報』第63号の巻頭に、「謹賀新年」と題して同院の全職員の職種別の氏名が掲載された<sup>6)</sup>。その職種別の中で外部運動員は、光延義民、大西義一、林長知、佐藤惣吾、入江大九郎、佐久間武男、渡辺万吉朗、草地磯吉、大島三郎の9人であった。このため、先の9人が、昨年より引き続き外部運動員として活動していくことになった。同運動員の仕事は3種類あり、1つは各地を訪問しての賛助員募集活動、2つは音楽幻燈隊で全国各地を巡回しての寄付金募集、3つは全国各

1902 年、1903 年の岡山孤児院の賛助員募集活動と  
全国的な支援ネットワークシステムの展開内容（中畠・菊池）（103）116

表 4 1902 年の本部直接および職員による賛助金の月別の集金内容

	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
本部直接収入	77.630	74.430	74.140	58.750	37.950	24.720	54.330	50.910	34.010	26.390	49.230	101.130
①に対する割合(%)	7.5	6.1	12.8	13.5	6.000	7.500	11.500	11.200	8.600	7.000	14.400	15.000
岡山出張員	102.600	88.700	74.050	59.150	52.2草地	46.7草地	53.65草地	42.95草地	41.150	49.7草地	36.7草地	41.85草地
西大寺出張員	6.700		6.000		3.3 草地		3.3 草地	2.0 草地		3.7 草地		
和気出張員								5.0 草地				
野々口出張員							0.2 草地					
妹尾出張員			7.700			5.3 草地						
茶屋町出張員			6.400			0.9 草地						
津山出張員	12.580	10.330	10.300		18.3草地	10.0草地	9.1 草地	8.5 草地	9.200	8.95草地		20.0草地
津山出張員												1.0佐久間
久世出張員	12.700	9.500	3.950		8.45草地	4.55草地	5.0 草地	4.3 草地	2.800	3.2 草地		6.4 草地
勝山出張員	1.700	3.200	1.500		3.1 草地	4.2 草地	1.6 草地	1.6 草地	1.600	1.7 草地		3.0 草地
落合出張員			2.300				7.6 草地					
西川出張員	2.200	2.900	0.900		0.5 草地	0.5 草地		0.6 草地	0.800	0.1 草地		2.9 草地
美作出張員			1.000									
総社出張員				20.300								
弓削出張員		0.800			1.9 草地	0.4 草地	0.7 草地	0.5 草地	0.300	0.3 草地		0.8 草地
倭文西村派員		0.500										
大井和村派員		27.000										
江興味派員		0.700				0.200						
撫川出張員		24.770		2.000	3.1 草地							
玉島出張員		16.900					4.1 草地		1.300		1.6 草地	
高梁出張員		6.000		8.200								
福山出張員	24.500	30.700			26.8佐藤	24.1佐藤		14.1佐藤		12.5草地	11.35草地	9.05草地
広島出張員								1.7 渡辺				
深津出張員					4.0 佐藤							
尾道出張員			24.300									
福知山出張員					1.0 光延							
篠山出張員					0.3 渡辺							
三田院派員	2.700											
宮市派員	4.300											
今治出張員			26.200	0.300	19.1大島					17.6大島		
波止浜出張員			7.200	2.000								
多度津出張員		15.950		8.700			9.8 草地		5.700		5.9 草地	
善通寺出張員		2.000		3.100			4.1 草地		0.200		3.2 草地	
東京出張員	445.600	385.470	2.500									
横浜出張員	7.700	51.700	2.800									
京都出張員	46.600	23.100	25.100		43.8佐藤	16.0大西	26.6佐藤	29.3佐藤	27.400	6.9 大西	42.9佐藤	41.4佐藤
同上										27.8佐藤		
大阪出張員	56.400	53.700		39.900	36.6光延		30.15佐藤	48.5佐藤	28.450		26.1佐藤	49.0佐藤
神戸出張員											1.3佐久間	
尼崎派員	14.300			1.800								
三田出張員					1.0 入江							
和歌山出張員							16.2佐藤					
徳島出張員							15.3渡辺					
八代出張員							4.5佐久間					
鹿児島出張員							1.9 光延					
生野出張員								2.0 渡辺				
福島出張員									9.400			
呉出張員									2.000			
宮崎出張員										1.5 森上		
飯塚出生員												8.75佐久間
佐世保出張員												35.2佐久間
①全賛助金	1,032.580	1,219.670	577.540	434.850	636.950	327.920	473.730	455.560	393.910	377.640	342.630	675.980

〈注〉出張員等の欄の市町村は略。草地は草地磯吉、佐藤は佐藤惣吾、光延は光延義民、渡辺は渡辺万吉郎、入江は入江大九郎、大西は、大西義一、大島は大島三郎、森上は森上信、佐久間は佐久間武男の略称。  
 （『岡山孤児院新報』第 64 号から第 75 号附録より作成）

地の主な駅等に掲置してある慈善函からの集金であった。

このうち、本年の賛助員募集活動を担当した職員の月別の集金状況をまとめると表4のようになり、5月以降はその担当者名と集金した市町村での集金額が確認できた。岡山市と岡山県内は、草地磯吉が担当し、その近隣県の市町は佐藤惣吾と草地を中心に、渡辺万吉郎と大島三郎、光延義民が時々加わっていたことが理解できた。特に、昨年6月19日に宮崎兵吉郎と宮崎利平が退職したことで草地の担当が拡大していた。さらに、京都市、大阪市、神戸市とその周辺や九州地方は佐藤を中心に、大西義一、光延、佐久間武男が加わり、入江大九郎、森上信の氏名も確認できた。

そこで、1月から4月までは、個々の集金地の担当者の特定を含めた月別の各職員による賛助員募集活動の内容を次に明らかにしていくことにする。

ただし、「東京出張員」が、1月に445円60銭、2月に385円47銭を集金し、「横浜出張員」が2月に51円70銭を集金したので、この活動を最初に解明し、また、大阪市と京都市でもほぼ毎月高額の集金があったため、その次にこれをまとめ、その後岡山県内を含む各市町村での賛助員募集活動の内容を解明していくことにする。

## (2) 東京市と横浜市での賛助員募集運動

1月と2月に東京市と横浜市で賛助金の集金額が高額になったのは、昨年1月から6月までと12月に東京市で岡山孤児院の事務所を開設して大々的な賛助員募集運動を展開し、その延長線上に、本年1月と2月に同運動を再開したからであった<sup>7)</sup>。

つまり、昨年11月14日の石井院長と大西、光延、林、入江、高塚甲子太郎校長による感話会で「三府運動」を決定し、30日に大西が東京市へ出発し、同運動を再開し、同市神田三崎町の婦女新聞社内にも同院東京事務所を設け、12月中に東京市より30円10銭、横浜市より32円を集金し、

新賛助員を 20 人募集した。

そして、本年 1 月 8 日午前 11 時の列車で入江が「東京運動」に出発し、同日の夜行で佐久間も東京市に向かい、大西を含む 3 人で同市での賛助員募集運動に着手したからであった。9 日後の 17 日には横浜市の大西と東京市の入江より同院に通信があり、翌 18 日にも大西、入江、および東京市の佐久間から通信が届き、20 日にも入江から、24 日には横浜市の大西と東京市の入江から、30 日には東京市の入江と佐久間から、31 日には横浜市の入江から通信が送付されてきた。

このうち、13 日発の佐久間よりの通信では、13 日から賛助員を訪問して集金に着手し、入江は赤坂を、佐久間は麻布で実施し 2 人で合計 47 円を集金したとの報告が届いた。翌 14 日発では、入江が青山学院より四ッ谷方面で、佐久間は麻布方面で集金し計 47 円を集めたとの報告があった。15 日発の入江よりは、佐久間が芝区方面、入江が牛込区で集金し計 32 円を集め、毎日午前 8 時から午後 6 時まで集金し、同 7 時より集金簿に記帳し同 10 時過に終わるので「随分疲れ」るため、詳細な「通信」が書かけないと記していた。16 日発の佐久間よりは、入江が牛込から小石川、佐久間が芝区で計 60 円を集金し、近衛公爵家では臨時寄付金 25 円を得、大西は横浜市に出発したとあり、翌 18 日発の佐久間よりは、入江が小石川、佐久間が芝区を廻り計 22 円 50 銭を集金し、芝区三田の阿部優子よりは菓子代 3 円の寄付があった。18 日発の入江からは、佐久間が麴町区を、入江は芝区で集金し計 36 円 70 銭を集めたと報告してきた。22 日発の入江よりは、昨夜 3 年ぶりに降雪で「銀世界」となったため 2 人もも休み「閑話」をしていると、横浜市の大西より電話があり、佐久間は同市へ出発したと記していた。そして、27 日発の佐久間よりは、入江は本郷に、横浜市から帰った佐久間は日本橋区で集金し、不在者もいたが計 36 円を集め、11 日から 25 日までの 15 日間で賛助金計 341 円、臨時寄付金計 28 円の全収入 369 円が集まり、かつ新賛助員に 15 人が加入したと、

2 人の連名による報告が届いた。また、その住所は、東京市神田区美土代町 2 丁目の美土代館とあり、同館に宿泊しながら東京市内の賛助員宅を訪問し集金活動と新賛助員募集を実施していたことが確認できた。また、29 日には入江と佐久間より 341 円 60 銭の送金があり、31 日には近衛公爵家より 25 円、阿部優子よりの 3 円も送金されてきた。

一方、大西からは、29 日発で横浜市尾上町 5 丁目の小田原屋旅館より、賛助金収入 115 円 54 銭 5 厘、臨時寄付金 25 銭の計 115 円 79 銭 5 厘となり、新賛助員に 16 人が加入したことが報告された。このため、先の入江と佐久間および大西の賛助金の集金額は合計 456 円 54 銭 5 厘となり、新賛助員に 31 人が加入したことが確認できた。

実は、表 4 中の 1 月の「東京出張員」の集金額が 445 円 60 銭で、「横浜出張員」の集金額が 7 円 70 銭であったため、合計 453 円 30 銭となり、先の 456 円 54 銭 4 厘と比較すると 3 円 24 銭 5 厘の差があったが、ほぼ 3 人の報告と一致し、1 月中の 3 人の「運動」の結果が理解できた。

そして、大西の報告で最も注目できたのは、2 月 12 日午後 3 時から同市の羽衣座で「市内賛助員紳士貴夫人方の御発起」により「慈善音楽幻燈会」を開催することを決定したとの報告であった。つまり、大西は、昨年末に横浜市を訪れて賛助金の集金等と同時に、同市の賛助員を組織して、慈善音楽幻燈会の開催を準備していたのであった。

その準備の結果、岡山孤児院横浜賛助員総代として 21 人が会主となり、「賛助員」に東京市の毛利安子（毛利元徳公爵夫人）、評議員に浜尾作子、鳩山春子、潮田千勢子、山脇房子の協賛を得て、次のような趣意書を作成し、「慈善音楽會」への来場と寄付金を依頼した。

### 趣 意 書

よに不幸なるものはあれどはからぬ災害によりて一家をうしないあるは  
父母兄弟に別れてよにたよりなきみなしごとなりはてたる幼児ほどあは



れはかなきものはあらじ／諸君よ諸君は浦安と名におふ國の民草の中に  
此の便りなき可憐の孤児が三萬有餘人あることを知り給へりやわが岡山  
の孤児院が數多きこれらのみなしごをしてあまねく聖代の恩澤に浴せ  
しめむの目的をもて去る明治二十年創立以來既に救育せし兒女の數は  
六百三名に上り今院内に在りて教養せらるゝもの二百七十名その藉を分  
くれは實に三府三十一縣の廣きに亘りてやゝ其の功の顯はるゝに至りた  
るはいとも／＼よろこばしきことなりかしこれひとへに熱心なる院主の  
精勵と博愛仁慈なる諸君の同情とに外ならずといへどもしかも全國何萬  
の孤児に對してはいまだ九牛の一毛とやいはむあはれ此の路頭に彷徨へ  
る幾多の可憐兒よこれをいかに救ふべきかいかに養ふべきか茲に妾等は  
此の不幸なるみなしごの爲にこのよみすべき事業の爲に慈善音樂會を催  
し其の所得を寄せ以て當院が爲すところの幾分をたすけむとすあはれ世  
に情あるますらをたちよ慈善に富みたるひめたちよ願はくは妾等か此舉  
を賛成し同胞相憐むの至情を垂れ給ひて終に全國をして浦安の名にそむ  
かざらしめんことを切にせちにあなかしこ

賛助員／公爵毛利安子／評議員／濱尾作子／鳩山春子／潮田千勢子／山  
脇房子／會主 岡山孤児院／横濱賛助員総代（イロハ順）／市原かね／  
石井はつ／石井ふみ／石川京／伊藤せい／猪股とみ／林たね／西村きく  
／渡邊まつ／畫上ゆう／河井りき／横山かく／高橋とし／中村とよ／日  
下部なを／福島まち／船越ちえ／有泉孝／里吉きん／北嶋ふさ／日能て  
る  
（『岡山孤児院新報』第 65 号）

このように、東京市の貴婦人達の協賛を得て、横浜市内の同院の賛助員  
の婦人達の連名により慈善音楽幻燈会が開催できることになった。そし  
て、この開催でもう 1 つ注目できたのが、1899（明治 32）年 5 月 5 日に  
鳩山春子、潮田千勢子、山脇房子等が発起人となり、板垣伯爵夫人、大隈  
伯爵夫人等の貴婦人達が賛成員に就任し、神田美土代町の青年会館で、同

院の音楽幻燈会を開催し、当時の日本の政界、官界、財界を代表する人物の夫人達から協力が得られたことが、今回の開催の背景にあったことである。また、8日後の1899年5月13日には、横浜市の港座で同幻燈会を開催した実績も加わったからであった。同時に、1899年5月5日の同幻燈会は、女性だけが主催者となった最初の同会であり、それを引き継ぐものであった点もさらに注目できた。

そして、このことは、趣意書の文面にも反映され、その作成者が女性であったことが理解できた。また、開催主旨も、「浦安」という日本の国の平穩無事を願う観点から岡山孤児院の重要性と必要性を具体的に例示し、「世に情あるますらをたちよ慈善に富みたるひめたちよ願はくは妾等が此舉を賛成し同胞相憐むの至情」によるとし、同じ日本人としてお互いに同情し合うという深い心を持つ立場から、来場と寄付を依頼していたからである。

また、この趣意書は、1月中に同市の鈴木活版所で印刷されたため、同院より送付したものでなく、これに「岡山孤児院慈善音楽幻燈會」という開催内容が同封され、各方面の関係者に配布されたと理解できた。さらに、この開催内容は、2月12日水曜日午後3時から羽衣町の羽衣座で開会し、その「開會順序」は次のようなものであった。

- 一 奏樂（君ヶ代）陸軍々樂隊／二 開會の辞 櫻井みな子／三 奏樂 陸軍々樂隊／四 手踊 中村成吉社中／五 三曲（千代春鶴の巣ごもり）大出文松社中／六 太神樂 曲藝 九一事 鏡味仙太郎外社中／祝獅子舞 傘毬品々之曲 水雲井茶椀之曲／西洋手術（徳利ナイフ）之曲 五階茶椀之曲／末廣萬度之曲 其外改良技藝數番／七 手踊 中村成吉社中／八 獨吟（ピアノ合奏）納所辨次郎君／九 奏樂 陸軍々樂隊／十 幻燈 岡山孤児院實況／十一 劍舞 東京白虎隊員／十二 奏樂 陸軍々樂隊
- （同上）

この「開會順序」をみると、同院の音楽幻燈隊が来横して同幻燈会を開催するプログラムではなく、陸軍軍楽隊と地元の中村成吉社中等の芸能関係者の出演は中心で、幻燈による石井院長の「岡山孤児院實況」の説明と東京白虎隊員の剣舞が加わるという内容であった。

また、同幻燈会の事務所は、尾上町 5 丁目の小田原屋に設けられ、入場券は、各会主の自宅、同会事務所、弁天通 4 の中野屋洋服店などの市内各所の「貼出札」のある所で、開会前日まで販売すると記してあった。

なお、当初の「開會順序」では、石井院長と大島三郎は来横する予定になっていたが、石井院長は来横できなかった。実は、父親の病気を見舞うため 1 月 23 日午前 11 時の列車で石井夫人、田中正善等を同伴して故郷高鍋町に出発し、同地に 20 日程滞在して 2 月 15 日に帰岡したからであった。

そして、この間の 2 月 7 日に、大島三郎が夜行列車で「横浜ニ応援」に出発し、7 日と 8 日には大西より通信が届き、8 日に高鍋町の石井院長より「炭谷姉或ハ誰カ横浜」に行くようにとの電報が届いた。このため、10 日に炭谷小梅と小野田鉄彌が同市に出発した。

一方、横浜市では、開催 1 週間前の 6 日より有志者が通券販売や広報に尽力し、「地名の貴婦人等自ら各戸」を訪れ「米観を勧誘」し、「過労の爲め数日間病臥」する者がいるほどの「斡旋」があった。

開会当日の 12 日は、午前中より発起人が会場の各部署で準備をし、午後 1 時には東京市より浜尾作子、鳩山春子、山脇房子の 3 夫人が来会し、鎌倉町よりは毛利安子の代理として 3 人の婦人も来横した他、共立女学校は午後から休講にして上級生を派遣し、接待に協力した。また、参観者は、午後 1 時前より会場に「人山をなして押寄せ」、同 3 時より開会し同 10 時に無事閉会したが、これは接待掛の奔走と警察官の「周到なる注意」によるものと、大西は記していた。

さらに、14 日の『横浜貿易新聞』でも次のように報道され、午後 3 時に開会し、同 5 時頃には広き羽衣座も 2 階と 3 階まで「満場立錫の餘地」

なく、2,000 余人が来場した。開会内容は前述した「開會順序」で実施されたようで、特に「孤児院實況の幻燈には入場者何れも同情の涙」を拭っていたと記していた。なお、同院の幻燈画の上映は大島が担当し、その説明は小野田が実施したとみる。また、「各令夫人並に令嬢等」が場内を駆廻り、新杵より 25 銭の菓子折 50 個、壽々木より 10 銭の磯藻中折 50 個、清林堂より 15 銭の菓子折 30 個、後藤文太郎よりラムネ 10 ダース、石井兵吉より 5 銭の菓子袋 100 個、五十鈴より南京豆 200 袋、中野より蜜柑 5 箱、堀田新太郎より 10 銭の菓子折 50 個、川北繁雄より煙草 2 箱等の寄贈があり、これらを会場内で販売した。

その結果は、24 日付の岡山孤児院横浜賛助員総代と会計委員中野英一郎名の「収入決算書」から確認でき、全収入が 1,383 円 20 銭で、この内訳は切符売上高 1,185 円 85 銭、臨時寄付金 58 円 25 銭、会場内ニ於ケル弁当其他寄贈品売上高 72 円 15 銭、画帳(『同院写真画』)売上高 15 円 25 銭、賛助金集金総高 51 円 70 銭であった。また、その支出総高が 413 円 30 銭 5 厘であったため、収益金は 959 円 30 銭 5 厘に達していた。

このため、横浜市の婦人(女性)賛助員の主催による同幻燈会は大盛会であったことが確認できた。さらに、先の切符販売者は、21 人の会主を含む 23 人と福音社であり、臨時寄付金の寄付者 25 人の氏名と金額および物品寄付者 13 人の氏名と物品名も判明した。加えて、新賛助員 38 人の加入と新地方委員に林翁、高橋とし子、中野英一郎、有泉幸子、日能てる子が就任した。そして、16 日午前 4 時に小野田が帰院し、同市での集金額が 1,341 円に達することを、同日同 2 時に故郷高鍋町より帰院した石井院長に報告したとみる。さらに、炭谷は 19 日に入江と帰院し、26 日に大西より先の「収入決算書」と 50 円が送付され、27 日には大島も帰院したため、横浜市での同幻燈会は全てが終了した。

一方、2 月中の東京市での賛助員募集活動は、6 日と 7 日に入江と佐々間から、27 日に佐々間から通信があり、その内容は判明しないが、全体

で 385 円 47 銭の集金となっていたことが確認できた。

以上が、1 月と 2 月に東京市と横浜市で賛助員募集活動を実施し、高額の賛助金集金等の成果をあげた具体的な内容である。

### （3）大阪出張所と京都市での賛助員募集活動

大阪出張所と京都市での賛助員金集金の概要は、表 4 の中段の「大阪出張員」と「京都出張員」の欄のようになる<sup>8)</sup>。そして、前述したように、昨年 11 月 14 日に「三府運動」を決定し、その直後から東京市で賛助員募集活動を再開したが、大阪府では本年 1 月 11 日に光延義民が「大坂運動」（以下原文からの引用以外は、大坂を全て大阪に直す）に出発し、「院務拡張の爲め大坂市定住事務員」となり、同市西区土佐堀裏町 6 番邸に「岡山孤児院大坂事務所」を設置し活動に着手した。16 日に同所の光延より「第一信」が届き、25 日、31 日にも通信が届き、2 月 3 日には 60 円が送金されてきたが、その間の活動は次のようなものであった。

11 日同市に着いた光延は、同土佐堀裏町の池田屋に仮事務所を置き「運動に着手」し、14 日より賛助員宅を訪問し、案内者と一緒に 1 週間の予定で全員から集金をすることにした。18 日は、中之島の森吉楼にて岡山県友会の新年宴会が開かれたので、同会で「本院の現況」を演説し、尽力を依頼した。翌 19 日は、前川啓太郎の紹介で道安医学士を訪れて基本金寄付を依頼した。25 日は、岡山県友会で知り合った同院の理解者である宇多弘道を訪問したところ、賛助員の勧誘を約束してくれ、27 日に同事務所を訪れた宇多に大阪市の地方委員を依頼し、承諾を得ていた。

26 日は、前川の紹介で特志者を訪問し、年一時金払契約の年賛助員 5 人の加入があった。また、前川は、平日の業務多忙の中、休業日の日曜日を利用してすでに 3 回同行し尽力してくれ、昼食も 3 度「西洋料理を御馳走」になっていた。27 日は、天満此花町の北山修医師を再訪したが、同氏は邑久郡神崎村の太田杏三医師の「賢息」であるため、同院の設立の起

源に「縁故」ある人物なので「大に御盡力」してくれることになったとの報告があった。

つまり、この太田杏三医師とは、石井院長が同医師の代診を担当した時に、四国巡礼中の母親より長男を引き受け、これを契機に岡山孤児院の前身である孤児教育会を設立したという深縁のある太田医師の息子にも出会い、協力が得られたのであった。

そして、28日と29日は、兵庫県川辺郡尼ヶ崎町に行き、地方委員の小森純一と小島、中城の3人に会い、彼らは熱心に尽力していたが、特に小森、小島が経営する燐寸製造工場の事務員は昨年末(12月11日、12日)の音楽幻燈会では熱心に尽力してくれ、今回は全員が賛助員に加入してくれたと記していた。さらに、当地の市原写真部は、地方委員と同音楽隊一行の大判写真3枚を寄付してくれ、飯井佐吉は陶器500個、神崎駅の駅員からはライオン慈善券45枚の寄付もあった。

また、2月1日には、宇多を再度訪問し、大阪紡績会社の各社員を紹介してくれ、毎月支払契約の月賛助員11人、年賛助員7人の加入を得た。同日には先に通知の他に博愛社に救助された孤児が「或る理由」によって戻されたが、親族に引受け手がないこの孤児を、婦人が同院に引率し送院するとの通知もあり、翌2日収容されたため、大阪事務所での孤児収容も確認できた。

そして、2月1日までに大阪市で新賛助員33人、尼ヶ崎町で20人の計53人を募集し、前者での集金額は56円40銭、後者では14円30銭、これに臨時寄付金4円50銭と池田屋慈善函金74銭8厘が加わったため、合計75円94銭8厘が集まったと報告してきた。このため、光延の大阪市等での1月中の賛助員募集活動の全貌が確認できた。

その後2月に入ると、2日に光延より60円が送金され、4日、5日、6日、7日、11日、12日、15日にも通信があり、26日には一時帰院し、集金した53円70銭と新賛助員31人の加入書を持参したとみる。また、この間

の活動内容は、8 日に北山修医師を訪れ、同院の基本金へ 5 年間で計 100 円を寄付する約束を取り付け、同夫人が年賛助員に、看護婦の前原ヨシ子と「抱車夫」の茨木常蔵が月賛助員に加入した。13 日は、「飛雪」の中神戸市の賛助員を訪問し、地方委員の田村新吉宅に宿泊し、同市の地方委員の松田治郎吉、浦木弘、三瀬千津江、吉井きよのの熱心な「盡力」を確認した。16 日は、旧友の原田確次郎を尋ね、基本金 100 円を寄付する特別賛助員への加入を約束してくれた。20 日は、関西学院を訪れ吉岡院長の紹介で、学生達を前にして「孤児院救済談」を試み、松本益吉教授が率先して賛助員に加入し、地方委員の矢島毅が学生に対する募集を実施することになった。そして、13 日から 21 日までの神戸市での賛助員への訪問活動などを終了し、大阪市へ帰った。

22 日は、宮川経輝牧師や宇佐美の周旋により、同院大阪事務所を同市中之島 6 丁目 79 番の宮川牧師の裏手に移転し大阪出張所とした。23 日は、友人の小川鶴次の紹介で福田彦太郎を訪問したが、福田は同市での音楽幻燈会の時に寄付金 10 円を集め、今回も賛助員募集に尽力してくれることになり、「小生は到る處に本院の同情者に逢ひ實に感謝」していると記していた。このため、大阪市で 2 月分の賛助金 53 円 70 銭を、神戸市で 1 月と 2 月分の 84 円 90 銭を、尼ヶ崎町で 4 円 40 銭と臨時寄付金 2 円 10 銭の計 145 円 50 銭を集金し、かつ、特別賛助員 2 人、年賛助員 22 人、月賛助員 31 人の計 55 人を募集したと報告してきた。

ただし、3 月以降の同市での活動は、手元の資料では十分に判明しないが、その後の動向と賛助金の集金額を記すと次のようになる。

3 月は、10 日光延が大阪市に出張し、26 日兵庫県三田町より通信が届き、28 日は丹波篠山から、31 日は宮津から、4 月 4 日は大阪市より届いたため、光延は丹波篠山方面でも活動していたが、これは 4 月 13 日から 5 月 11 日まで同地方で開催する同院の音楽幻燈会の開催の可能性を調査する意図が含まれていたとみる。なお、3 月中の集金は確認できなかった。

4月は、5日に光延から通信が届き、9日、11日、13日、15日も大阪市から、18日は伊丹町での同幻燈会（17日、18日）開催の応援に行った報告のようで、21日と24日も三田町（22日、23日開催）の同幻燈会の応援、27日は有馬町（25日開催）での応援報告のようであった。このため、前半は大阪市で賛助金39円90銭を集金し、新賛助員8人を募集し、後半は同幻燈会の開催を応援したことが理解できた。

5月も光延は、1日に柏原町（3日、4日に同幻燈会を開催）から、2日は伊丹町と有馬町での同幻燈会の収入70円を送付し、5日と7日は柏原町から、9日は佐治村（8日、9日開催）から、12日は篠山町（10日、11日開催）から通信が届き、20日に帰院していた。その後大阪市にもどり36円60銭を集金し新賛助員5人を募集したとみる。

一方、京都市の賛助員募集活動は、渡辺万吉郎が担当し、昨年末に出発し、2月1日に帰院した。同市では、「毎日草鞋」を履いて賛助員宅を訪問し「御禮並に集金」を実施したが、「土地不案内」のため「困却」しつつも賛助金46円60銭、臨時寄付金13円40銭、新賛助員19人を募集した。

2月の同募集活動は、たぶん渡辺が2月初旬頃に同市に出張して実施し、3月1日に2人の姉妹の入院児を伴い帰院し、賛助金23円10銭を集金し、新賛助員8人を募集したとみる。

3月は、10日に渡辺が出発し、21日帰院し25円10銭を集金し、新賛助員4人を募集したようであった。その後再度京都市に出張し、28日、29日、31日に同市から通信が届き、4月4日と8日は兵庫県伊丹町から通信が届いたため、丹波篠山地方での音楽幻燈会の準備に着手したことが理解できた。

このため、4月は同市での集金を実施せず、5月からは10日に佐藤が賛助金集金のため出張し、24日に帰院し43円80銭を持参した。6月は、15日に大西が帰院したが、たぶん途中京都市で下車し16円を集金したとみる。



7 月からは、佐藤が大阪市と京都市での賛助員募集活動を担当することになり、2 日、3 日、10 日に大阪市より通信が届き、12 日に帰院したが、この間に京都市で 26 円 60 銭、大阪市で 30 円 15 銭、和歌山市等で 16 円 20 銭を集金し、寄付金 14 円 50 銭を持参した。17 日再度京都市へ出張し、29 日と 30 日には在京中の院児 1 人が「脚気危篤」との電報が届いたため、佐藤にこの院児の入院を手配していた。そして、8 月 1 日佐藤より同病気児の病状についての通知があり、4 日に帰院したが病気児は「快方」に向っていると報告があった。

6 日には佐藤と草地在、福山町に出張し 14 円 10 銭を集金して帰院し、その後佐藤は大阪市に出発したようで、27 日同市の佐藤より「桃山英和学校入学心得書」の送付依頼があった。また、9 月 1 日には京都市在住の、先の病気児本人から「追々快方」と「謝意」の書面が届く一方で、佐藤よりは病気児の帰院について「相談」する書簡が届いていたため、3 日佐藤に病気児を同伴して帰院するように通知し、2 人は 8 日に帰院した。そして、この間に京都市で 29 円 30 銭（8 月分）、大阪市で 48 円 50 銭（同）を集金して、持参したとみる。

その後、佐藤は、再度京都市へ出張したようで、10 月 1 日に同市より通信が届き、9 日と 10 日には同院の京都慈善音楽幻燈会が開催された。同幻燈会は、大西が先発員として 8 月に同市に行き、地方委員の辻慶三郎や安藤正二郎、八木小春等と 11 日に第 1 回有志者会を開き準備を重ねて開催したものであった。この内容は後日別稿でまとめるので省略するが、佐藤はこの間に賛助金 27 円 40 銭（9 月分）を集金し、大阪市でも 28 円 45 銭（同）を集め 15 日に帰院したとみる。また、大西が 25 日に京都市より帰院したが、この時賛助金 6 円 90 銭を持参し、同市での同幻燈会で 93 人の新賛助員を募集したことが確認できた。

さらに、11 月 12 日には、京都市の佐藤より「入院児ノ通知」があったことから、同市で賛助員募集活動を実施し、その後 16 日に帰院し、市内

で27円80銭(10月分)を集め持参したと理解できた。18日には、佐藤と入江が尾道市での音楽幻燈会の準備のため出発し、23日に帰院し、翌24日からは大阪市と京都市での賛助員募集活動に出発したため、前者で26円10銭(11月分)、後者で42円90銭を集金したことが理解できた。

手元の資料では、12月の佐藤の出張日を確認できないが、京都市で41円40銭、大阪市で49円を集金した。このため、大阪市では、光延が1月から5月まで、京都市では渡辺が1月から3月までを担当し、5月の京都市と7月から12月までの両市では佐藤が賛助員募集活動を1人で担当したがほぼ確認できた。このことから、賛助員が多い市では、1人の職員が毎月同一の賛助員宅を訪問して集金することが、労力と経費の両面で効果的であるとの判断があったことが理解できた。

#### (4) 岡山県内と隣県等の1月から4月の賛助員募集活動

次に、東京市と横浜市および大阪市と京都市以外の、岡山県内と隣県等の市町村での職員による賛助員募集活動をみていくことにする<sup>9)</sup>。その集金活動の概要は、表4のようになる。1月は、6日に佐藤惣吾が賛助員募集のため広島県福山町に出発し、11日に帰院し24円50銭を集金した。また、7日には、草地磯吉が「周防柳井」に出発したが、これは山口県の三田尻村で2円70銭と佐波村宮市で4円30銭の集金であったとみる。

17日には、佐波村等より帰院した草地が、美作地方の賛助金集金等に出発し、津山町で12円58銭、久世町で12円70銭、勝山町で1円70銭、西川村で2円20銭を集金し、3人の新賛助員を募集し25日帰院した。

24日には、佐藤が久米郡に出発し、27日に通信があり、弓削村で80銭、倭文西村で50銭、大井和村で27円を集金したとみる。また、28日には草地が上道郡西大寺町に出発し6円70銭を集金した。

2月に入ると、17日に草地が美作地方の賛助金集金等に出発し、津山町で10円33銭、久世町で9円50銭、勝山町で3円20銭、西川村で2円

90 銭を集金し、3 月 3 日に帰院した。27 日には、福山町の佐藤より通信があったことから、途中の撫川村で 24 円 70 銭、玉島町で 16 円 90 銭を集金したとみられ、福山町では 30 円 70 銭を集め、3 月 3 日に帰院した。その他 2 月には、御津郡江與味村で 70 銭、上房郡高梁町で 6 円、香川県多度津町で 15 円 90 銭と善通寺町で 2 円を集金していたが、その担当職員は判明しなかった。

3 月に入ると、3 日に帰院した草地が、翌 4 日に妹尾町で 7 円 70 銭、茶屋町で 6 円 40 銭、西大寺町で 6 円を集金し 5 日に帰院したようであった。また、同日佐藤は、尾道市に出張し 24 円 30 銭を集金し 9 人の新賛助員を募集した。

そして、2 月 19 日に東京市から帰った入江が 27 日に今治町より通信を送付してきたことから、賛助金の集金に着手し、かつ、同町での音楽幻燈会の開催準備も兼ねていたようで、3 月 6 日石井院長は入江宛に「オンガクカイヒラクベシ」と電報を打つと、入江は 8 日に一度帰院し、翌 9 日に再度同町に出発し、23 日と 24 日に同町で同幻燈会を開催し、賛助金 26 円 20 銭を集めたことが理解できた。また、波止浜村でも 7 円 20 銭を集めたが、これはその後 26 日に同村で開催した同幻燈会で集めたとみることができた。

一方、草地は、12 日「作州」に出張し、津山町で 10 円 30 銭、久世町で 3 円 95 銭、勝山町で 1 円 50 銭、落合町で 2 円 30 銭、西川村で 90 銭、美作で 1 円を集金したようで、18 日に帰院した。

4 月は、5 日に総社町に出張中の佐藤から「賛助員募集ノ報」が届き、6 日にも届いたため、同町で 20 円 30 銭、撫川村で 2 円、さらに高梁町で 8 円 20 銭を募集したことが理解できた。

また、21 日に草地が「讃岐」から帰院したとあることから、多摩津町で 8 円 70 銭、善通寺町で 3 円 10 銭を集金し、さらに、讃岐鉄道の高松駅外 6 駅に掲置してある慈善函から 7 円 78 銭 8 厘を集めてきたことも理解

でき、慈善函の集金も並行して実施する場合もあったことが判明した。

以上が、4月までの岡山県内とその隣県の市町村での賛助金募集活動であるが、ここで追加したいのが表4の3行目の「岡山出張員」による多額の集金を、だれが実施したかということである。手元の資料でそれを裏付けることはできないが、前述してきた活動状況から判断すると、草地と佐藤が前記した各地での集金活動以外の日に、岡山市内の賛助員を訪問して1月102円60銭、2月88円70銭、3月74円50銭、4月59円15銭を集めていたと理解できた。

#### (5) 岡山県内と隣県等の5月から12月までの賛助員募集活動

そして、5月になると、4日と25日に草地が「美作」より帰院したとあったことから、表4のように津山町で18円30銭、久世町で8円45銭、勝山町で3円10銭、西川村で50銭、弓削村で1円90銭を集金してきたことが理解できた<sup>10)</sup>。その他、草地は、岡山市で52円20銭、西大寺町で3円30銭、撫川村で3円10銭を集金していた。

一方、佐藤は、10日から24日まで京都市で賛助金を集金して帰院し、27日から福山町での音楽幻燈会の応援に出張したが、この時に同町で賛助金を26円80銭、深津村で4円を集金し、6月9日に帰院した。また、5月20日に丹波篠山地方より帰院した大島が、24日に今治町に出張し19円10銭を集金した。

6月は、表4から草地が美作地方の各町村他と岡山市内で集金し、佐藤は福山町で集金し、その集金額が確認できたが、活動日程は判明しなかった。

7月もやはり、表4から草地が美作地方の各町村と岡山市および近隣の町村で集金し、その金額が確認できた。加えて、10日には、渡辺が賛助金集金や各駅に掲置された慈善函の集金等のため徳島市に出発し、13日と17日同市より通信が届き、23日は奈良県郡山町、26日は岐阜県大垣町

から通信が届き、31 日帰院し 19 円 45 銭を持参した。このうちの 15 円 30 銭は徳島市で集金したとみる。また、賛助金、基本金、慈善函の集金額は合計 101 円 80 銭 2 厘で、旅費や宿泊費等の支出が 30 円 24 銭 6 厘あったため、残金（収益金）は 71 円 55 銭 6 厘となり、その収益率は 70%であった。このような収支状況から、職員による賛助員募集活動では、旅費や宿泊費等の支出があり、全ての集金額が収益ではなかったことが具体例として確認できた。また、各駅に掲置された慈善函の集金を同時に実施することで効率的な活動になっていたことも理解できた。なお、渡辺は、8 月 1 日に「東京及九州」へ慈善函を発送し、倉敷町の自宅に戻った。

8 月は、6 日に草地と佐藤が福山町に出発し、佐藤が同町で 14 円 10 銭を集金し、8 日には渡辺が広島市に向かい 1 円 70 銭を集金して 20 日帰院したが、この間の 13 日と 18 日の報告から、同市への出張の目的は「孤児ヲ団体トシテ移住」することの調査で、そのついでに賛助金を集金したと理解できた。

25 日には、渡辺が播但線より帰院したとあることから兵庫県の同線沿線の各駅の慈善函と生野町から賛助金 2 円を集金、その後讃岐地方に出発し、31 日に同地から報告があった。そして、9 月 3 日には、善通寺町の陽気楼の渡辺より通信が届き、5 日には同町で発熱と下痢を発症したので 2 日に倉敷町の自宅に帰宅したとの手紙が届き、17 日、19 日も自宅から病気にため帰院できずと通信が届いた。5 日の手紙では、善通寺町では尊地兄が「運動」し、仏教徒である赤門前の床屋の堀川涉次郎は「義侠の勇み肌」にて、「不憫の児どもの為めゆへ嫌な耶蘇二味方」と話し、尽力してくれているなどを通知してきた。このため、多度津町で 5 円 70 銭、善通寺町で 20 銭を集金したとみることができた。

9 月中のその他の各市町村での集金活動は、表 4 になり、岡山市や美作地方および玉島町は草地が引き続き担当したとみることができた。

10 月は、2 日に大島が今治町から 11 歳の孤児を伴い帰院したことが確

認できたため、同時に同町から賛助金 17 円 60 銭を集金してきたとみることができた。その他は、昨月同様に草地在岡山市や美作地方、そして西大寺町や福山町でも集金活動を実施していた。

11 月は、11 日に草地在「讃岐」より帰院したことから、多度津町で 5 円 90 銭、善通寺町で 3 円 20 銭を集金し、福山町での 11 円 35 銭と王島町での 1 円 60 銭もこの時の集金かしれない。また、草地在、岡山市で 36 円 70 銭を集金したが、美作地方での集金はなかった。ただし、25 日と 26 日に津山町で音楽幻燈会を開催し、草地も 21 日同町へ出張し、同幻燈会に協力していた。

12 月は、19 日佐久間が佐世保市方面へ賛助募集活動に出発し、22 日、26 日に佐世保市より通信があり、29 日飯塚町より帰院したため、飯塚町で 8 円 75 銭、佐世保市で 35 円 20 銭を集め、宮島駅と広島駅の慈善函よりも 2 円 21 銭 4 厘を持参した。

また、24 日に草地在「作州」より帰院したことから、津山町で 20 円など、従来通りの町村で集金していた。その他福山町で 9 円 5 銭、岡山市で 41 円 85 銭を集めていた。

以上が、岡山県内と隣県等の市町村での賛助金募集活動であるが、1 月から 4 月は草地と佐藤が中心となり実施し、5 月からは佐藤が大阪市と京都市での集金を担当することになり、草地在活動の中心となり、県外の集金では各駅の慈善函の集金も並行して実施し、さらに、音楽幻燈会の開催にも協力して効率的な活動を行っていたことが理解できた。

#### (6) 岡山本部での賛助員募集活動

岡山本部での賛助員募集活動は、同院へ直接賛助金を送金してきた賛助員と新賛助員への加入を直接申込んだ者への対応であり、この 2 つの概要は表 2 と表 4 の中でまとめた<sup>11)</sup>。また、前述してきた職員による賛助員募集や後述する地方委員の活動と連携しつつ、同募集活動の全てを最終的に

掌握するのが岡山本部の役割であるが、これらの活動はすでに（1）から（5）の中で記し、今後（7）、（8）と（3）の中でまとめるので、ここでは先の 2 つの概要のみを記すことにする。

同院へ直接賛助金を送金してきた賛助員の概要については、表 4 の 1 行目の「本部直接収入」が賛助員から毎月送金された金額の合計で、1 月が 77 円 63 銭と同月の全賛助金（1,032 円 58 銭）の 7.5%（以下カッコ内）となり、2 月が 74 円 43 銭（6.1）、3 月が 74 円 14 銭（7.2）と 70 円台の収入であったが、4 月からは減少し、4 月、7 月、8 月が 50 円台で、11 月が 40 円台、5 月と 9 月が 30 円台、6 月と 10 月が 20 円台となり、12 月が 101 円 13 銭に急増していた。このため、全賛助金に対する割合は、5 月の最小 6.0% から 12 月の最大 15.0% と、毎月の収入にとって「本部直接収入」が安定的な収入の 1 つとして重要であったことが理解できた。

一方、新賛助員の直接申込（加入）は、表 2 の各月別の「本部」の欄がその加入者数で、1 月 17 人、2 月 51 人、3 月 31 人、4 月 123 人、5 月 57 人、6 月 20 人、7 月 34 人、8 月 31 人、9 月 20 人、10 月 22 人、11 月 56 人、12 月 18 人で、合計 480 人と全体の加入者（2,048 人）の 23.4% を占めやはり重要であった。

また、1902 年の新賛助員の道府県別の加入者数の分布は、39 道府県（表 2）に及んだが、このうち直接申込者の分布は、愛知県、鳥取県、佐賀県、長崎県を除く 35 道府県であったため、職員、音楽幻燈会、地方委員による募集を実施していない岡山県内を含む全国各地やハワイ、台湾、カナダ、韓国という海外からの申込者、および同幻燈会開催後の申込者の受け皿になっていたと理解できた。また、全国各地からの加入者の中には、雑誌『をんな』を発刊していた大日本女学会からの紹介もあり、全国からの加入に貢献していた。

そして、道府県の月別の申込者が 10 人以上に達していたのは、2 月が岡山県 32 人で、その大半は久米郡大井和村からの 27 人の加入によるもの

であった。さらに、4月の神奈川県12人は、大日本軍艦朝日の乗組員12人の加入によるもので、3月の9人も同様で、その後の同県からの加入も軍艦朝日からが多かった。また、4月の岡山県37人は惣社町から21人の加入などによるもので、台湾11人は木村繁太郎の募集と入会によるもので、ハワイ31人はホノルルからの加入者で、後述する林による同地での幻燈会で募集したものであった。

5月の福岡県39人は、嘉穂郡の忠隈住友炭坑の39人の加入によるもので、7月の同県13人も同炭坑等からの加入であった。6月の熊本県12人は、6月19日、20日の熊本市で開催した同院の音楽幻燈会の影響による加入であった。11月の宮崎県36人は、東臼郡北方村27人、西臼郡七析村7人、西諸縣郡小林村2人で、いずれも金田の募集によるものであったが、こちらも9月10日と11日に延岡町で同幻燈会を開催しており、金田が同会を参観して啓蒙を受けて近隣の村で新賛助員を募集し、加入者を郵送してきたものであった。

#### (7) 音楽幻燈隊での新賛助員募集と地方委員の就任

音楽幻燈隊での新賛助員募集と地方委員の就任は、昨年に引き続き実施され、本年はこれまで開催してこなかった阪神地方や九州地方、そして広島県内の市町村を中心に同幻燈会を開催していた<sup>12)</sup>。同幻燈会では、音楽隊の演奏や岡山孤児院の歴史と現況の幻燈画を上映して、寄付金等や新賛助員を募集し、発起人等の中から地方委員が就任し、同院への継続的な支援ネットワークシステムの拠点が設けられた。このような、同幻燈隊の巡回運動そのものは、今後別稿でまとめるため、その詳細は省略し、開催月日、開催地、寄付金収入、新賛助員（新賛）、地方委員に就任した人物の氏名をまとめると表5のようになる。

つまり、2月12日の横浜市の開催は、前述したように同幻燈隊が実施したものではなかったが、新賛助員を71人募集し、3月23日、24日の



今治町の開催から同隊の巡回運動が始まった。この今治町での開催は、賛助員の要望による開催であった。また、26 日の波止浜村での開催も賛助員の八木光三郎等の尽力により実施し、前者で 33 人、後者で 5 人の新賛助員を募集した。

表 5 1902 年の音楽幻燈会等の開催概要と新賛助員数と新地方委員

開催月日	開催地	寄付収入	新賛	新地方委員氏名
(2/12	神 横浜市	1,383.200	71人)	
3/23.24	愛 今治町	271.280	33	賛助員の希望で開催(第 66-5) 67-7-4 人 66-4 人
3/26	媛 波止浜村	60.795	5	同上
4/17.18	伊丹町	112.380	0	松沢好利
4/22.23	兵 三田町	136.815	1	
4/25	庫 有馬町	61.960	0	日野駒太郎
5/3.4	県 柏原町	67.169	10	林 清吉
5/8.9	佐治村	53.551	0	中島敏之助、足立権之助
5/10.11	篠山町	114.061	6	
5/13.14	京 福知山町	114.061	14	大槻利之助
(5/17	東 東京市	1,782.250	9)	
5/30.31	広 福山町	252.683	0	
6/19.20	熊 熊本市	589.870	67	梶原保人、小泉猶次郎、田添猪八郎
6/24.25.26	福 大牟田町	533.144	15	鹿毛和一
7/1.2	熊 八代町	249.717	37	白瀬苗清
7/5.6	本 日奈久町	113.080	9	松本清三郎、松本定三
7/10	鹿 川内町	139.100	1	樋口審治
7/17.18	児 加治木村	128.420	1	大竹常業、土橋莊一、宮内盛直、杉田平助
7/21.22.24	島 鹿児島市	1,076.270	33	山崎 弘
7/26	国分村	84.380	1	富田善次郎、鎌田 廉
7/30	都城町	162.980	6	大草敬助、堤 季知
8/2	宮 高岡村	66.250	10	加世田家興
8/25.26	崎 高鍋町	302.460	21	
9/1.2	宮崎町	362.090	35	白井卯之助
9/10.11	県 延岡町	310.310	23	
9/13	富高新町	79.200	4	衛藤一哉、水原琢士
(10/9.10	京 京都市	1,683.470	99)	
10/21.22.23	高 高知市	1,050.710	60	
10/28.29	兵 神戸市	974.675	54	
11/25.26	岡 津山町	248.325	15	
12/4-7	呉 市	1,325.115	13	中山国三郎、松井守真、小泉 澄、天野星夫
12/10.11.12	尾道市	419.950	45	
12/14.15	島 松永町	103.960	16	

〈注〉カッコは岡山孤児院の音楽幻燈会ではない。神は神奈川県、愛媛は愛媛県、京は京都府、東は東京府、広は広島県、熊と熊本は熊本県、福は福岡県、高は高知県、兵は兵庫県、岡は岡山県の略称である。また、新賛は新賛助員の略で、新賛助員の合計は 714 人である。(『岡山孤児院新報』第 64 号から第 75 号より)

その後は、4月17日から5月14日までは兵庫県の丹波篠山地方の7町村を巡回したが、新賛助員は1人から14人しか募集できなかったが、地方委員は三田町以外の6町村に就任した。

5月17日の東京市での東京慈善大音楽会は、同幻燈隊による活動ではなかったが9人の新賛助員を募集した。5月30日と31日の広島県福山町での開催と、その後の6月19日から9月13日までは熊本県、福岡県、鹿児島県、宮崎県内の14市町村を巡回したが、新賛助員が最も多く加入したのが熊本市67人、次が八代町37人、宮崎町35人、鹿児島市33人と続き、すでに地方委員が活動していた高鍋町と延岡町以外の12市町村に同委員が就任した。

10月9日、10日の京都市での京都慈善音楽幻燈会も同幻燈隊によるものではなかったが、地方委員の辻慶三郎や安藤正二郎らが中心となり開催し新賛助員99人を募集した。その後は、同幻燈隊による同会が21日から23日に高知市で開催し新賛助員60人を、28日、29日は神戸市で開催し54人、11月25日、26日は岡山県津山町で15人、12月4日から7日は広島県呉市で13人と新地方委員4人を、10日から12日は尾道市で新賛助員45人、14日、15日は松永町で16人を募集した。このため、同幻燈隊では、30ヶ所で同幻燈会を開催、新賛助員を535人募集し、これに加えて横浜市、東京市、京都市での独自の同幻燈会で179人を集めたため、合計714人となり、本年の新賛助員総数2,048人の34.9%を占め、重要な役割を担っていたことに変わりがなかった。さらに、地方委員が31人就任したため、同院への支援ネットワークシステムの拠点が兵庫県内と九州地方を中心に拡大していくことが確認できた。

#### (8) ハワイの幻燈会での新賛助員募集

ハワイでの新賛助員募集は、2月24日に林長知が幻燈機等を持参して出発し、同地で幻燈会を開催し新賛助員と寄付金を募集した活動であ

る<sup>13)</sup>。また、同地での同幻燈会の開催は 2 回目であった。このため、前述した音楽幻燈隊の巡回運動に関連する活動であり、その詳細は省略し、新賛助員募集に絞ってまとめることにする。

つまり、2 月 23 日午後 7 時より林の送別会が開催されたが、ハワイへの渡航の目的が「賛助員募集の爲め」とあり、新賛助員募集が主要な目的の 1 つであったことが理解できた。

そして、林は、翌 24 日出発し、25 日神戸港に行き、3 月 1 日ペキン号（3,128 トン）でハワイに向けて出帆した。その後の経過は次のようであった。途中の航海は 4 日ほど海があれ、船酔いで食事が取れなかった他は問題がなく、12 日目にホノルル港に到着した。上陸にあたっては検疫等があり、幻燈機等の荷物が普通の人の 3 倍もあり大変苦勞したが、3 月 16 日には前回のハワイでの幻燈会で世話になった奥村多喜衛牧師を訪れ、今後の活動への協力を依頼した。また、後からくる音楽隊員（高原寿正）を待った。しかし、この間岡山孤児院の方では、18 日にこの高原のハワイ行きを取りやめ、活版部長として仕事をする事を決意したため、彼のハワイ行きは中止になってしまった。

さらに、5 月 6 日石井院長は、林に手紙を出し「音楽隊は送らぬ幻燈隊の運動をやって」「幻燈会を開きつつ早く布哇を巡回し尽して帰国せよ」と指示した。この指示が林の元に着いたのは 6 月初旬とみられ、林はその後幻燈会をハワイで開催した。その幻燈会は 7 月 8 日から準備を開始して、第 1 回を 7 月 10 日に開催し、以後 8 月 2 日まで 12 回の開催が確認でき、それをまとめると表 6 のようになる。

ただし、ハワイでの新賛助員募集は、到着後の 3 月から実施された。なお、2 月にハワイキング町の尾崎商店の尾崎朔子よりの加入があったがこれは大日本女学会の紹介によるもので、林による募集ではなかった。3 月中に奥村多喜衛牧師の紹介でホノルルの蛙谷菊次郎が加入したが、この加入は 4 月 2 日に林から石井院長に届いた書簡で通知されたものとみる。

表 6 1902 年のハワイでの幻燈会開催の状況

月日	開催地	開催場所	対象	備 考	
7/10	ラハイナ	オーハウスキャンプ	邦人	ラハイ教会時政英作、藤好治郎吉等の協力	3 夜共大盛會 24 弗 75 仙
7/11	ラハイナ	美 以 教 会		オ・エチ・ギュリキも来会	
7/12	ラハイナ	カアナバリキャンプ	邦人	ライハより 7 里離れた土地、時政と馬車で行く	
7/16	ワイロク	日本人基督教会	邦人	田中義一伝道師、上村二男医師等の協力、盛会、	34 弗 70 仙
7/19	スペクル	下第 3 番キャンプ	邦人	田中伝道師と児玉章吉伝道師、21 日寄付募集、	10 弗 65 仙
7/22	スペクル	新ミルキャンプ	邦人	児玉伝道師、新井喜平の協力、23 日寄付募集、	16 弗 75 仙
7/24	スペクル	東 5 番キャンプ	邦人	25 日夜石川、笹屋等の協力で寄付を募集、	5 弗 85 仙
7/26	スペクル	西 5 番キャンプ	邦人	野田勝造と馬車で行く、27 日各戸へ寄付募集、	17 弗 65 仙
7/28	スペクル	ス ト ウ ア	邦人	伊達氏宅で、備後の国の人と、	9 弗
7/29	バイヤ	バイヤキャンプ	邦人	辻密太郎伝道師の協力、	22 弗 85 仙
7/30	バイヤ	下バイヤキャンプ	邦人	辻伝道師、菅谷の協力、即時寄付 5 弗 75 仙	
8/ 2	カフルイ	小 学 校	邦人	辻伝道師と五味の協力、山の中のため即時寄付募集 14 弗	

(『岡山孤児院新報』第 71 号、72 号)

さらに、20 日には、林よりの書面に 45 弗の正金銀行手形が在中されていたが、これはホノルルから 31 人が新賛助員に加入した賛助金であった。5 月 5 日にも林から書簡が届き、翌 6 日石井院長は前述したように、同地での幻燈会の開催とその後の帰国を通知したが、13 日に林から返信があり、この 2 つの林の書簡の中に、ホノルルでの 28 人の新賛助員の加入の報告が含まれていたとみる。

さらに、幻燈会の開催に着手した時期の 7 月 29 日に林から通信が届き、かつ、ホノルルのキャッスルエステートの会計担当のエル・チー・ベックより、キャッスル夫人からの寄付金 100 弗 (200 円) が贈られてきたが、これも林の活動に関係した寄付金であった。また、この時林から 59 人の新賛助員の加入が報告された。

8 月 6 日には、林からラハイナ発とワイロク発の 2 つの書簡が届き、幻燈会を開催し「盛ナル」歓迎を受け、前者で 24 弗 75 仙、後者で 34 弗 70 仙の集金し、取りあえず 30 弗を送金してきた。

9 月 5 日にも林より通信があり、10 月 9 日と 10 日にも林から書簡が届いたが、これらの書簡の中でホノルル 13 人、カワイ島リファイ耕地 12 人、マウイ島クラ耕地 1 人の計 26 人の新賛助員の加入と、ハワイでの 1 年分

の賛助金出金者 112 人と 2 年分の同出金者 1 人からの集金結果が報告されたとみる。

そして、11 月 5 日には、林より「ハワイ運動終了セシニヨリ事務員ヲ辞シ渡米スル旨」の書簡が届き、林はハワイでの幻燈会を終了し、米国に出発したことが確認できた。また、この時にハワイ島ハナより今井信藏美以教会牧師の紹介で 6 人の新賛助員の加入報告が届いたとみる。さらに、10 日には、同地の今井牧師より日曜学校生徒他の有志よりの 24 弗 80 仙が寄贈されてきた。

このため、ハワイでは、林の活動により、新賛助員が合計 152 人に達した。その後林は、11 月 28 日に米国から 15 弗を送金してきたことから、米国に着き、同院からすでに米国に渡り生活していた渡辺栄太郎、長谷川昇二郎にも会っていたとみるができたが、この内容は、別稿でまとめることにする。

### 3) 地方委員の賛助員募集活動

#### (1) 地方委員による賛助員募集の概要

1902 年の地方委員の賛助員募集活動を解明する前提として、同年の地方委員による岡山孤児院の支援ネットワークシステムがどのように形成され、全国に分布していたかから確認する必要がある、それをまとめると表 7 のようになる<sup>14)</sup>。つまり、カナダと全国の 40 道府県の 169 市区町村に 403 人の地方委員が分布し、岩手県、秋田県、宮城県、山形県、山梨県、三重県、沖縄県にはまだ存在していなかった。

このうち、地方委員の市町村分布が最も多かったのは岡山県で、19 市町村に 30 人が存在し、以下は北から地方区分別に記すと、北海道は 11 区町村に 27 人であった。東北地方は、岩手県他 3 県を除く、青森県内と福島県内の計 5 市町村に 10 人、関東地方は全 7 府県内の計 9 市町に 37 人、中部地方は山梨県を除く 8 県内の 18 市町村に 63 人、近畿地方は三重県を

表 7 1902 年現在の道府県別の市町村別の地方委員数

道府県名	市町村別地方委員数（ゴシック体は新地方委員に就任した市区町村名と人数で、カッコ内も同様）
岡山県	金川村 1、香登村 2、藤戸村 1、下津井町 2、長浜町 1、鴻村 1、撫川村 1、倉敷町 2、笠岡町 1、高梁町 1、新見町 1、勝山町 1、落合町 1、津山町 4、西川村 3、弓削村 2、早島町 1、有漢村 1、味野村 3、計 19 市町村 30 人
北海道	札幌区 5、小樽区 3、函館区 3、岩見沢町 1、旭川町 4、滝川町 3、荻伏村 3、浦河町 2、佐瑠太村 1、上下村 1、門別村 1、計 11 区町村 27 人
青森県	青森市 1、藤崎村 2、弘前市 4、計 3 市村 7 人
福島県	喜多方町 1、福島町 2、計 2 町 3 人
茨城県	水戸市 8、計 1 市 8 人
栃木県	宇都宮市 4、足利町 4、計 2 市町 8 人
群馬県	前橋市 2、計 1 市 2 人
埼玉県	大宮町 1、計 1 町 1 人
千葉県	千葉市 1、計 1 市 1 人
東京府	東京市 6、計 1 市 6 人
神奈川県	横浜市 4 (5)、横須賀町 2、計 2 市町 11 人
新潟県	新潟市 5、柏崎町 4、高田町 3、高城村 4、計 4 市町村 16 人
長野県	飯田町 2、長野市 4、上田町 3、松本町 5、計 4 市町 14 人
富山県	富山市 4、高岡市 1、計 2 市 5 人
石川県	金沢市 5 (8)、計 1 市 13 人
福井県	福井市 2、敦賀町 3、計 2 市町 5 人
静岡県	静岡市 3、沼津町 2、計 2 市町 5 人
岐阜県	岐阜市 1、大垣町 2、計 2 市町 3 人
愛知県	名古屋市 2、計 1 市 2 人
滋賀県	大津市 1、八幡町 1 (1)、彦根町 4、長浜町 2、計 4 市町 9 人
京都府	京都市 3、福知山町 1、計 2 市町 4 人
大阪府	大阪市 2 (1)、堺市 1、岸和田町 2、計 3 市町 6 人
兵庫県	神戸市 12 (1)、三田町 1、姫路市 1、西宮町 1、尼崎町 3、御影町 1、住吉村 1、伊丹町 1、有馬町 1、篠山町 1、柏原町 1、佐治村 2、生野町 1、計 13 市町村 28 人
奈良県	奈良市 1、計 1 市 1 人
和歌山県	和歌山市 2、田辺町 1、新宮町 3、御坊町 1、計 4 市町村 7 人
鳥取県	鳥取市 1、米子町 1、計 2 市町 2 人
島根県	松江市 1、広瀬町 1、計 2 市町 2 人
広島県	広島市 5 (1)、貢村 3、尾道市 1、福山市 2、深津町 1、府中町 4、新一村 2、松永村 1、鞆津町 2、三原町 4、吉舎村 1、呉市 4、計 12 市町村 31 人
山口県	山口町 2、岩国町 2、柳井津町 2、徳山町 1、富海村 1、佐波村 1、右田村 2、三田尻村 2、長府村 1、下関市 5、日置村 1、計 11 市町村 20 人
徳島県	徳島市 3 (1)、川島町 1、計 2 市町 5 人
香川県	高松市 3、丸亀市 2、多度津町 3、善通寺村 2、坂出町 1、淵崎村 1、計 6 市町村 12 人
愛媛県	松山市 7、今治町 4、菊間村 2、郡中町 1、宇和島町 2、新居浜町 2、八幡浜町 1、別子鉾山 4、吉田町 1、三津浜町 1、計 10 市町村 25 人
高知県	高知市 4、安芸町 1、本山村 2、芳野村 1、計 4 市町村 8 人
福岡県	福岡市 4、若松町 7、柳河町 2、場内村 1、沖端村 1、久留米市 4、小倉市 3、門司市 9 (1)、大牟田町 1、計 9 市町村 33 人
佐賀県	佐賀市 5、唐津町 2、計 2 市町 7 人
長崎県	長崎市 3、佐世保村 3、計 2 市村 6 人
熊本県	熊本市 3、日奈久町 2、八代町 1、計 3 市町 6 人
大分県	中津町 1、計 1 町 1 人
宮崎県	宮崎町 1 (1)、延岡町 1、細島町 1、飯肥村 1、高鍋町 1、上江村 1、高岡町 1、都城町 2、富高新町 2、計 9 町村 12 人
鹿児島県	鹿児島市 1、隅之城村 1、加治木町 4、国分村 2、計 4 市町村 8 人
カナダ	バンクーバー 2、計 1 市 2 人

〈注〉斜文字は各道府県の区市町村の計と全地方委員数。

（『明治三十三年六月調岡山孤児院地方委員姓名録』、『岡山孤児院新報』第 46 号から第 75 号より作成）

除く 6 府県内の 27 市町村に 56 人であった。中国地方は、前述した岡山県を除く全 4 県内の 27 市町村に 55 人、四国地方は全 4 県の 22 市町村等に 50 人、九州地方は沖縄県を除く 7 県の 30 市町村に 73 人であった。これに、カナダのバンクーバーに 2 人加わり、合計カナダと全国 40 道府県内の 169 市区町村等に 403 人に達していた。

また、地方委員の仕事は、地元の担当地区の賛助員から①毎月または 1 年分の賛助金の集金し、②彼らへ『岡山孤児院新報』を配付し、③新賛助員や④臨時寄付金を募集し、さらに⑤地元の孤貧児の同院への収容依頼等を実施することであった。これらの仕事を前提に、地方委員の賛助金集金を中心に、1902 年の個々の地方委員の活動をまとめると表 8 のようになり、全ての地方委員が賛助金の集金を実施し、同院へ送金していたわけではなかったことが確認できた。そこで、次に表 7 と表 8 を参照しながら賛助金集金を実施した個々の地方委員の活動内容を、前述した岡山県から始め、その後は地方区分別にまとめてみる。

## （2）岡山県内の地方委員の活動

岡山県には、19 市町村に 30 人の地方委員がいたが、このうち集金活動が確認できたのは 11 町村の 11 人であった<sup>15)</sup>。香登村の溝手文太郎牧師は、1 月、2 月、5 月、7 月、11 月、12 月に計 31 円 60 銭を集金し、5 月 2 日には佐世保市の粟並友雄の長女に 1 年忌の追善のための 2 円、津山町の日下惣太郎の 10 銭、同町の山本茂外 1 人からのライオン慈善券 58 枚の寄付を取次いだ。また、8 月 6 日には岡山市内でコレラが流行していることを知り見舞状を送付し、12 月 24 日には同牧師他 2 人より 1 円 30 銭の臨時寄付が送金されてきた。早島町の溝手保太郎は 6 月に 11 円 40 銭、11 月には味野村で 4 円 50 銭の計 15 円 50 銭を集金して送付してきた。

倉敷町の大原孫三郎は、1901 年 3 月から同院の基本金管理者に就任し、同院の活動を積極的に支援していたが、地方委員としても 3 月、4 月、5

月、11月に計 83 円 90 銭を集金し送金してきた。

高梁町の伊吹五郎牧師は、当初からの地方委員で毎年継続的な集金を実施し、本年は 3 月と 7 月から 12 月まで計 33 円 60 銭を、藤戸村天城の津下豊次郎は 2 月から 6 月と 8 月、10 月、12 月に定期的に計 17 円 40 銭を送金してきた。

落合町の山田義信は、1 月、2 月、5 月、6 月、8 月、9 月、11 月、12 月に計 26 円 90 銭を、味野村の津谷政治は 2 月、4 月、8 月に計 24 円 10 銭を、笠岡町の浅野富平は 2 月と 3 月、5 月と 6 月、8 月から 12 月に計 35 円 60 銭を送金し、8 月 6 日にはコレラ流行を知り同院に見舞状を送付し、8 日には賛助金と笠岡駅の慈善函からの集金を送付してきたため、慈善函の集金も同時に実施していたことが確認できた。有漢村の莊三郎吉が 2 月、9 月、12 月に計 11 円 70 銭を集金し、8 月 6 日にはコレラ流行を知り同院に見舞状を送付してきた。

長浜町吹上の守屋と西川村の桑山茂は 1 月にそれぞれ 4 円 10 銭と 4 円 90 銭を集金していたが、その後送金はなく、邑久郡の犬島は地方委員ではなかったが 1 円送金してきた。

### (3) 北海道と東北地方の地方委員の活動

北海道には、11 区町村に 27 人の地方委員が存在したが、このうち 6 人等が集金を実施した<sup>16)</sup>。函館区の磯野員為は 2 月、3 月、9 月に計 108 円 40 銭の高額を送金してきた。札幌区の越智善三郎も 2 月、5 月、7 月から 9 月に計 69 円 20 銭を、同区の蜂谷他 2 人も 3 月に 22 円 90 銭を、小樽区の蜂谷芳太郎も 1 月に 24 円を集金し送付してきた。

岩見沢村の内田政雄は、2 月、5 月、9 月、11 月に計 16 円 90 銭を、旭川町の辻秀は 2 月から 7 月、9 月、10 月、12 月とほぼ毎月集金し計 22 円を送金してきた。また、4 月 9 日に届いた辻からの書簡によると、同地の賛助員村渡度の尽力により旭川駅、滝川駅、永山駅に慈善函が 3 月から掲



置できたとの報告があり、北海道では地方委員と賛助員が協力して慈善函を地元の駅に掲置する活動が確認でき、9 月 3 日には辻から滝川駅の慈善函からの集金が送付されてきた。上下方村の浅川義一は 1 月に 2 円 80 銭を送金し、旭川町の深谷は地方委員ではないが 5 月に 70 銭を送ってきた。

一方、東北地方では、全 6 県中 2 県の 5 市町村に 10 人の地方委員が存在し、青森県には 3 市村に 7 人いたが、実際に活動していたのは、青森市の川口栄之助が 1 月と 12 月に計 48 円 30 銭を、弘前市の石戸谷軍三郎が 2 月、8 月、9 月に計 26 円 60 銭を、同市の工藤玖三が 8 月に 45 円 40 銭を、藤崎村の長谷川英治が 3 月と 11 月に計 19 円 40 銭を集金し送金してきた。この他、2 月 3 日石戸谷の取次で、横町の日曜学校生徒が「貧しい友」のために集めた 1 円と菊地はなの手紙が送付されてきた。

また、福島県には、2 町に 3 人いたが、実際に活動したのは福島町の長谷川裕牧師のみで、1 月、3 月、6 月、8 月に計 8 円 20 銭を送金してきた。

#### （4）関東地方の地方委員の活動

関東地方には、全 7 府県の 9 市町に 37 人の地方委員が存在したが、実際に活動していたのは 4 府県の 6 市町の 8 人であった<sup>17)</sup>。このうち、神奈川県では、2 市町の 11 人中、横浜市の林翁が 1 月に 4 円 27 銭を、同市の中野英一郎が 3 月から 5 月、7 月から 10 月、12 月に計 85 円 30 銭を集金し送金してきた。また、横須賀町の鈴木忠兵衛が 2 月、4 月、6 月、9 月に計 37 円 60 銭、同町の清水候忠も 5 月に 9 円 50 銭を送金してきた。

東京府では、1 市 6 人中、東京市の福島四郎のみが 8 月に 2 円を送金してきた。また、福島は、当時『婦女新聞』を発刊し、『岡山孤児院新報』にも広告を掲載し、6 月 16 日に同新聞社から「憐れなる母子」のために寄付された寄附金 5 円 65 銭が同院に転送され、9 月 12 日にも遺児の貯金 1 円 50 銭が福島取次で、10 月 13 日にも同新聞社を経て東京市の尾木愛子より古着が寄贈されてきた。なお、集金はなかったが、小崎弘道は 3 月

31日に連名で遺族よりの寄付金10円を、12月17日にはハワイの井上胤文からの5弗(9円97銭5厘)取次いでいた。

栃木県では、2市町の8人中、宇都宮市の山田六三郎が1月、5月、12月に計20円90銭を、足利町の石川高吉が2月、4月、5月に計4円を、同町の森田金之助が9月に2円40銭を送金してきた。このうち、山田からは、5月28日に地元の孤児1人を送院してきたため、地方委員の取次による入院例が確認できた。

茨城県では、水戸市の8人中、松井久吉のみが2月、4月、6月、12月に計20円90銭を集金し送金してきた。

#### (5) 中部地方の地方委員の活動

中部地方には、山梨県を除く8県の18市町村に63人の地方委員が存在したが、実際に活動していたのは8県の20人等であった<sup>18)</sup>。このうち、新潟県では、4市町村の16人中新潟市の谷資敬が7月と12月に計12円30銭を、同市の大橋正吉が12月に7円60銭を、高田町の荒木信実が2月から12月に計41円40銭を、長岡町の木村喜博が8月に20円20銭を集金し送金してきた。

富山県では、2市の5人中、富山市の戸田忠厚が2月から4月に計4円20銭を集金し、7月と9月から12月は新たに地方委員に就任した服部たきよが計10円20銭を送金してきた。

石川県では、金沢市に13人等の地方委員がいたが、齊藤音作が2月から4月と6月に計51円80銭を送金し、その後齊藤が甲府市へ転居したため、中島孝一郎が地方委員に就任してこれを引き継ぎ、8月、10月、12月に計26円90銭を集金して送金してきた。また、金沢第四高等学校委員からも、3月、6月、7月、12月に計21円50銭が送金され、他に、地方委員ではないが同市の人見から4月に90銭が送られてきた。このうち、金沢第四高等学校委員との関連では、3月21日に、同校の杉村教授が同

院を参観し、翌 22 日には同校時習寮から 2 円 11 銭 5 厘の寄付があった。さらに、7 月 8 日には同校時習寮より 70 銭の寄付があり、この寄付を参加したのが先の金沢第四高等学校委員の藤森忠一郎（卒業生）あったことから、同校時習寮内に同校委員（地方委員）が置かれ、同寮のメンバーが同校委員（地方委員）を引き継いでいたとみることができた。

福井県では、2 市町の 5 人中、福井市の高田とし子が 1 月と 2 月に計 11 円 40 銭を、敦賀町の池見栄吉が 1 月、3 月、7 月、9 月に計 3 円 10 銭を送金してきた。

長野県では、4 市町の 14 人中、飯田町の小沢慎が 2 月に 5 円を、松本町の中川市郎兵衛が 5 月、10 月、12 月に計 24 円 90 銭を、上田町の河合操が 7 月と 11 月に計 13 円 90 銭を、長野市の松村忠雄が 8 月と 12 月に計 35 円 50 銭を集金して送付してきた。また、村松は、1 月 7 日に宮沢とみよりの亡娘の追善寄付 5 円を取次いでいた。

岐阜県では、2 市町の 3 人中、岐阜市の伊木久次郎が 4 月と 10 月に計 11 円 10 銭を、大垣町の中村賢三が 7 月に 4 円 30 銭を集金して送金してきた。

静岡県では、2 市町の 5 人中、静岡市の藤波甚助が 2 月と 3 月、5 月、7 月、9 月、12 月に計 42 円 80 銭を、沼津町の和田伝太郎が 12 月に 4 円 50 銭を集金して送付してきた。この他、藤波は、12 月 8 日に北村質店からの克己寄付 20 円を取次いでいた。また、愛知県では、名古屋市に 2 人いたが、赤司繁太郎牧師のみが 8 月と 12 月に計 24 円 10 銭を送金してきた。

#### （6）近畿地方の地方委員の活動

近畿地方には、三重県を除く 6 府県の 27 市町村に 56 人が存在したが、実際に活動したのは 6 府県の 28 人であった<sup>19)</sup>。このうち、滋賀県では、4 市町の 9 人中、大津市の簗田信吉が 1 月から 12 月まで毎月集金し計 46 円 50 銭を、彦根町の森山虎之助が 2 月、3 月、6 月、8 月、12 月に計 35 円

40 銭を送金してきた。このうち、森山は、2 月 5 日に、集金した同月の賛助金 7 円 70 銭に加え、一昨年の音楽幻燈会の落とし物 50 銭の送付と伊藤繁一の年 2 円での新賛助員加入および、昨年 5 月に退会した藤野たつの賛助金の立替処理についての報告が届いた。また、9 月 16 日に、彦根教会員の西山キク子の永眠により子息から依頼があった同院の基本金への寄付 10 円を取次いでいた。長浜町の伊藤鶴子は、2 月と 5 月に計 10 円 30 銭を送金し、5 月 23 日には中居篤次郎家の法事の賽銭を取次いだ。同町の林幾太郎は 11 月と 12 月に計 8 円 70 銭を、八幡町の大島一雄は 10 月に 6 円 90 銭を集金して送付してきた。

京都府では、2 市町の 4 人中、京都市の安藤正二郎が 2 月、4 月、7 月に計 23 円 20 銭を送金してきたが、前述したように 3 月までは職員の渡辺万吉郎が京都市で、5 月から 12 月は佐藤惣吾が中心的に集金していたため、地方委員と職員が分担して活動していたと理解できた。また、10 月 9 日、10 日の京都市での京都慈善音楽幻燈会は、地方委員の辻慶三郎や安藤正二郎らが中心となり開催し、安藤は 12 月 9 日に女理髪業者による慈善演芸会の収入 10 円の同院への寄付を取次いだ。

大阪府でも、前述したように、1 月から大阪事務所（出張所）を設けて光延義民が同市内の集金活動に着手し、7 月からは佐藤が実施していた。このためか、大阪市の 3 人の地方委員の直接的な集金はなかったが、4 月に松枝が 6 円、5 月に集金人の有本が 24 円 90 銭を送金してきた。そして、堺市の青木由太郎は、1 月からの隔月と 12 月に計 25 円 90 銭を集金し、12 月 30 日には堺駅の慈善函よりの 51 銭を送付してきた。岸和田町の二宮平次郎は 2 月、4 月、5 月、7 月、11 月、12 月に計 29 円 70 銭を集金して送付してきた。

兵庫県では、13 市町村に 28 人の地方委員が分布していたが、うち 10 市町村の 16 人が集金活動を実施していた。明石町の中西幸太郎が、1 月、4 月から 6 月、8 月、10 月、12 月に計 37 円 90 銭を、住吉村の吉田亀之助

が 2 月、4 月、7 月、12 月に計 17 円 90 銭を、西宮町の岡田藤吉が 2 月から 12 月に計 22 円 10 銭を、尼崎町の小森純一が 3 月から 6 月、9 月から 12 月に計 20 円 60 銭を集金して送付してきた。このうち、3 月の岡田の送金は、31 日に同院に届き、賛助金 1 円 56 銭（表 8 は 2 円）と新賛員 1 人および高山岩三郎からの古新聞売上金 35 銭の寄付報告であった。また、吉田は、近隣の岡本村の 11 歳の孤児を伴い同院に入院させていた。

神戸市では、鎌原政子が 2 月、6 月、11 月に計 21 円 20 銭を、吉井きよのが 2 月、5 月から 7 月、9 月、11 月、12 月に計 19 円 77 銭を、田村新吉が同様の月に計 165 円 70 銭を、浦木弘が 2 月、6 月、9 月、11 月、12 月に計 50 円 10 銭を、矢島毅が 2 月、5 月、7 月、11 月、12 月に計 15 円 20 銭を、松田治郎吉が 2 月、5 月から 7 月、9 月、11 月、12 月に計 24 円 70 銭を、三瀬千津江が 2 月、7 月、11 月、12 月に計 45 円 70 銭を集金して送付してきた。このため、神戸市ではこの 7 人の集金額の合計が 342 円 37 銭となり、各市町村別では最も高額を集金額となり、特に、田村新吉は、1 人で 165 円 70 銭を集め、個人の集金額としても最高額であったため、同市では各地方委員が担当地区を分担しつつ、組織的かつ精力的な活動を実施していたことが確認できた。また、田村は、12 月 17 日に横川ふいよりの寄付物品 20 余点を取次いでいた。

また、姫路市では、品川惣三郎が 3 月、6 月、9 月、12 月に計 32 円を集金し、9 月 5 日と 12 月 30 日には姫路駅の慈善函よりの 1 円 6 銭と 1 円 33 銭を送金してきた。三田町では斎藤素一郎が 4 月、8 月に計 1 円 90 銭を集金し、4 月 22 日、23 日の三田町での同院の音楽幻燈会では発起人兼会計を担当した。8 月に就任した生野町の吉川繁次郎は 8 月から 10 月、12 月に計 12 円を集金し、8 月に 5 人、9 月に 9 人の新賛助員を募集した。篠山町の萩原林三郎が 8 月に 1 円を、柏原町の林清吉が 8 月、11 月に計 4 円 80 銭を送金してきたが、これらの送金は 4 月中旬から 5 月中旬に同地方を音楽幻燈隊が巡回し、その時に地方委員に就任した人達が活動をした

ためであった。

奈良県では、奈良市に1人おり、その1人の片桐麟太郎牧師が昨年8月に転居したため秋田猪太郎が就任し、1月、3月、5月から10月までに計11円70銭を送金してきた。このうち、3月31日には、同月の賛助金と寄付金計1円14銭（表8は1円30銭）を小為替券で送金したとの報告があり、『同院新報』15部程の送付および寄附金50銭は西川襄治の5歳の誕生を祝しての寄付で、西川の父は米国留学中で、母は「当高等女学校」（奈良女子高等師範学校か）の教官と記してあった。

和歌山県では、4市町村の7人中、和歌山市の茨木昭一が2月と4月から5月に計37円を、田辺町の伊藤貫一が2月、3月、5月、9月に計16円20銭を、御坊町の山本薫一が4月、6月、10月、12月に計10円60銭を集金して送金してきた。

#### （7）中国地方の地方委員の活動

中国地方には、全5県に地方委員が存在し、前述した岡山県を除くと、27市町村に55人いたが、実際に活動をしていたのは、5県の18人であった<sup>20)</sup>。このうち、鳥取県では、2市町の2人とも活動し、鳥取市の井伊松蔵は5月に14円50銭を、米子町の岡島太治郎は5月、7月、9月に計12円10銭を集金して送付してきた。

島根県では、2町に2人がいたが、この2人の活動は確認できなかった。ただ、大森町の布施から3月と12月に4円60銭が、西郷町の加藤から5月に1円70銭が送金されてきたことが確認できた。

広島県では、12市町村の31人中、広島市の吉見が1月、3月、6月に計14円80銭を、同市の村田里が1月、3月、6月から8月、11月に計16円70銭を、同市の日下部愛之助が4月、5月、8月、11月に計37円40銭を集金し、8月7日には台湾守備砲兵第一大隊第三中隊兵員一同からのライオン歯磨の慈善券384枚の寄付を取次いだ。同市の牧原純一が6月、

7 月、9 月、11 月に計 13 円 30 銭を集金して送金してきた。さらに、鞆町の貫主税が 3 月と 6 月に計 1 円を、三原町の西川玄治が 3 月から 10 月に計 7 円 30 銭を送金してきた。

山口県では、11 市町村の 20 人中、日置村の松場が 1 月から 3 月、5 月から 7 月、9 月から 11 月に計 19 円 60 銭を、岩国町の小田重喜右衛門が 1 月、6 月、12 月に計 20 円を、富海村の松下績が 1 月に 3 円 10 銭を、長府村の釘宮甲太郎が 1 月に 8 円 80 銭を、同村の末永頼太郎が 7 月に 3 円 40 銭を集金して送付してきた。さらに、山口町の河原実雄が 2 月、5 月、7 月、10 月、12 月に計 30 円 10 銭を、三田尻村の木村可一が 7 月に 3 円 90 銭を送金してきた。赤間関市（下関市）の富海松兵衛は、2 月、5 月、12 月に計 34 円 50 銭を送金し、このうち 2 月の送金は 25 日に同院に届き、かつ富海が経営する錦波楼に掲置していた慈善函の 2 円 33 銭と封書に入った 5 円も送金し、この封書の 5 円は基本金への寄付と記されていた。また、8 月 4 日には、富海より依頼のあった孤女 7 歳が入院し、10 月 16 日には来院し「各自天性に應じ其天職に盡瘁すべき事」を勧話した。12 月 10 日には慈善函の寄付金 1 円 18 銭 6 厘が送金され、24 日にはクリスマスのために 5 円が、31 日には富海の取次で佐藤得太郎よりの 50 銭が送金されてきた。このため、富海は、①賛助金の集金、②『岡山孤児院新報』を配付し、③新賛助員、④臨時寄付金を募集し、⑤孤貧児の収容依頼、⑥慈善函の集金を実施する、同院が目指す地方委員の 6 つの役割を具体的に実行する模範的な地方委員であったと理解できた。

#### （8）四国地方の地方委員の活動

四国地方には、全 4 県の 22 市町村等に 50 人の地方委員がいたが、実際に活動していたのは全 4 県の 19 人他であった<sup>21)</sup>。このうち、徳島県では、2 市町の 5 人中、川島町の佐藤孝助が 7 月と 11 月に計 6 円 80 銭を集金して送付してただけであった。

香川県では、6市町村等の12人中、丸亀市の北川孟次が1月、3月から5月、7月から12月に計43円60銭を、高松市の大川茂平が4月、5月、8月、10月、11月に計42円50銭を、同市の増井嘉吉が4月に38円45銭を、讃岐鉄道の秋守平八郎が5月に10円20銭を集金して送金してきた。

愛媛県では、10市町村等の25人中、松山市の祝田米太郎が1月、8月、9月に計6円10銭を集金し、8月13日には伊予鉄道の慈善函の投入金6円36銭2厘を送付してきた。同市の田中義弘が2月、3月、5月、7月に計8円35銭を集金して送付してきた。また、新浜村の柿原正一が1月から12月まで毎月集金し計42円を、別子銅山の常喜秀五郎も毎月集金し計37円80銭を送金してきた。また、常喜は、4月2日に住友別子鉱山の所員2人と来院し、途中の伊予から尾道まで乗船した木津川丸の船中で竹筒2本を回して同院のために寄付金を募集し4円17銭4厘を集め持参した。翌3日岡山市で同別子鉱山役員親睦会が開催され、4日に10円の寄付があった。5月26日には、常喜が『同院新報』を同鉱山採鉱課の坂本文雄や東方栄蔵に配付したところ、彼らが同僚の「慈善心ニ訴」えて募金した1円94銭を取次いだ。8月29日には、別子小足谷婦人会よりの寄付金50銭を取次ぎ、9月22日には同婦人会より毎月50銭の寄付申込も取次いだ。12月29日には、常喜の取次で同婦人会の賛助金1円50銭が新居浜村の地方委員の柿原を通して送られてきた。また、同時に柿原は、住友別子銅山鉱業所製錬課員の賛成を得て本年1月から同課に同院の慈善函を設置し、各課員の毎月の月俸の銭以下を投入した寄付金計1円も一緒に送ってきた。このように、常喜と柿原は相互に連絡を取りながら、住友別子銅山鉱業所とその地域の関係者を啓蒙し、彼らからの賛助金や臨時寄附金を取次ぎ、その結果同地域一帯で岡山孤児院を支援するような社会現象が生まれつつあったと理解できた。

八幡浜町の二宮茂後は1月、3月、5月、7月、8月、10月、12月に計22円20銭を、宇和島町の本村は1月、3月から7月、9月から12月に計



13 円 80 銭を、三津浜町の齊所功は 2 月、5 月、8 月に計 4 円 30 銭を、川之江町の毛利は 2 月に 40 銭を集金して送金してきた。

さらに、今治町では、4 人の地方委員が 2 月に今治地方委員として 44 円 20 銭を送金してきた他に、石井政治が 5 月に 2 円を、菊間村の西村憲が 5 月に 2 円を送金してきた。このような活動内容から、愛媛県では、地方委員が活発に活動していたことが理解できた。

高知県では、4 市町村の 8 人中、高知市の村田宗兵衛が 4 月、7 月、9 月、10 月、12 月に計 26 円 70 銭を、本山村の畠山克己が 9 月に 10 円を、安芸町の埜村二三が 10 月に 2 円 10 銭を集金して送金してきた。このうち、埜村は、10 月 21 日、22 日、23 日の高知市での同院の音楽幻燈会の時に、同氏の令嬢が救済した 8 歳を同院に依頼し 30 日に入院した。さらに、村田は 3 月 15 日に、商用で年末京阪地方に出張の際梅田駅の慈善函にも寄付している濱田恒一郎他 1 人よりの寄付金 2 円 29 銭を取次ぎ、11 月 27 日にも 8 円を取次ぎ送金し、12 月 21 日には、村田が入院を依頼した同市の 12 歳の棄児が単身新高知丸に乗船し同院に到着し、29 日には村田の取次で先の棄児ために募集した 4 円 18 銭が送られてきた。

#### （9）九州地方での地方委員の活動

九州地方には、沖縄県を除く 7 県の 30 市町村に 73 人の地方委員が分布していたが、実際に活動していたのは、7 県の 27 人であった<sup>22)</sup>。このうち、福岡県では、9 市町村の 33 人中、福岡市の片山静之助が 1 月から 6 月、8 月、9 月、11 月に計 31 円 90 銭を、久留米市の米村常吉が 1 月、4 月、6 月、10 月に計 13 円 20 銭を、小倉町の柴田薫之が 1 月、2 月、6 月、8 月から 12 月に計 41 円 70 銭を、その柴田は岡山市内でコレラが流行していることを知り、8 月 4 日に院主と職員に「御苦勞之事」と「御自愛」の見舞状を、生徒（院児）には「必ず父上の命」に従い「流行病」に罹れぬようにとの「注意」の書簡を送ってきた。9 月 11 日にも同院で「コレラ患者」

が出なかったことを祝し、かつ、さらに注意し赤痢の予防を促す書簡を送ってきた。柳河町の笹尾昇造が2月、4月、6月、7月、10月、12月に23円50銭を集金して送付し、1月13日には立花千里他4姉弟からの米1俵分の3円50銭の寄付金を取次いだ。さらに、門司市の鶴原五郎が3月に15円を、同市の岸耕田郎が3月と5月に計11円30銭を、同市の相川正蔵が6月と7月に計14円70銭を、大牟田町の鹿毛和一が12月に5円60銭を集金して送付してきた。

佐賀県では、2市町の7人中、唐津町の佐藤林賀が1月に14円を、佐賀市の西牟田新八が5月に10円90銭を集金して送付してきた。長崎県では、2市村の6人中、長崎市の佐々木辰三が1月と10月に計53円10銭を、同市の鯨島が4月、6月、10月から12月に計70円10銭を、同市の堀江が11月に60銭を、佐世保市の川浪荘一が3月と12月に計9円を、同市の出口が12月に5円50銭を集金して送付してきた。

熊本県では、3市町の6人中、熊本市の田添猪太郎が9月、10月、12月に計22円80銭を集金し、10月29日には熊本女学校生徒松田しちから貯金珠に入った17銭を取次いだ。八代町の白瀬苗清が12月に6円を集金して送付してきた。大分県では、中津町の野依暦蔵のみが地方委員であったが、その野依が1月、4月、5月、7月、8月に計14円30銭を集金して送付し、10月20日には同院から中津駅の慈善函の修繕を依頼していた。

宮崎県では、9町村の12人中、延岡町の加藤馨之助が1月、10月、11月に計15円を集金し、10月4日には加藤が募集した寄付物品が送付されてきた。飫肥村の日高孝平が1月、10月、12月に計11円80銭を、高鍋町の末藤新市が1月、7月、12月に3円20銭を、同町の浜田超道が10月と12月に計7円75銭を集金して送付し、10月28日には来院した。さらに、高岡町の加世田家興が9月から12月に2円80銭を、宮崎町の白井卯之助が10月から12月に計11円90銭を、都城町の大草敬助が11月に1円70銭を、富高町の新衛藤一哉も11月に1円60銭を集金して送付して

きた。鹿児島県では、4 市町村の 8 人中、鹿児島市の山崎弘のみが 9 月と 10 月に計 11 円 20 銭を集金して送付してきたが、その山崎が 11 月 29 日に永眠したとの通知が同院に届き 12 月 4 日に弔状を送付した。

なお、福岡県大牟田町と熊本県、宮崎県、鹿児島県では、9 月以降に送金が多くなったが、これは同院の音楽幻燈隊が 6 月中旬から 9 月中旬にかけて同地方を巡回し、その時に地方委員に就任した者が集金活動を実施したためであり、同幻燈隊の巡回運動との相乗効果が再確認できた。

#### （10）カナダのバンクーバーに地方委員が就任

『岡山孤児院新報』第 64 号の「新地方委員」の欄に、カナダのバンクーバー（晩香坡）の長嶺源子と乗本蘭三が、1 月から地方委員に就任することが紹介された。海外からの正式な地方委員の就任は、この 2 人が最初であり注目すべき事実であった<sup>23)</sup>。

その契機になったのは、すでに神戸市で地方委員として活動していた田村新吉が、1 月 18 日に同院（21 日着）に送った書簡からであった。田村は、バンクーバーに田村商会を設けて、同地で初めて日本雑貨商を開業し、日本とカナダを往復していた。さらに、同院で働いていた正富壽が 1899 年 8 月からバンクーバーの田村商会で働くことになり、同地で働きながらすでに関係者から同院への臨時寄付金や賛助員を募集し、何度も送付してきていた。このような背景の中で、田村が本年（1902 年）1 月 12 日にバンクーバーから帰国し、臨時寄付金と賛助金計 31 円 4 銭を銀行為替で同院へ送金すると同時に、その内容を 18 日付の書簡で報告してきた。

この書簡によると、同地の長嶺源姉の尽力により募集した、次のような「同情者諸氏」の臨時寄付金と賛助金を預かったと記載があり、賛助金として滝尾知吉、乗本蘭三、同妻、高橋栄助、金子民三郎の 5 人の各 1 円 20 銭の計 6 円が含まれていた。

一金六円——	臨時寄附	清水精三郎
		全 菊子
一〃壹円貳十錢	賛助金 三五年一月十二日	㊤滝尾卯吉
一〃三円六十錢	臨時キフ	乗本蘭三
一〃壹円貳十錢	賛助金 三五年一月十二日	㊤全 全
一〃壹円貳十錢	全 全	㊤全 (妻君)
一〃三円——	臨時キフ	長嶺源子
一〃五拾錢	全	高橋栄助
一〃壹円貳十錢	賛助金 三五年一月十二日	㊤全 全
一〃五拾錢	臨時キフ	長屋 巖
一〃五拾錢	全	中川弟二
一〃五拾錢	全	吉田桂藏
一〃壹円——	全	井田又男
一〃貳円——	全	金子ムラ子
一〃壹円——	全	金子民三郎
一〃壹円貳十錢	賛助金 三四年一月十二日	㊤全 全
一〃五円——	臨時キフ	田村新吉
一〃壹円四拾四錢	全	サンバンホーム
合計金參拾壹円〇四錢		

(『明治三十五年一月中日誌』)

さらに、北米カナダのバンクーバーとニューウエストミンスター地方の地方委員に長嶺源子と乗本蘭三を依頼したので、「御承認」のうえ「貴院目録」に記載し、かつ、前記の臨時寄付金等が掲載された『同院新報』とその後の『同院新報』を毎回 20 部および賛助員申込書数枚を、長嶺と乗本宛に郵送するようにとの依頼もあった。また、昨年田村に送付してきた『岡山孤児院写真画』を、長嶺と乗本にも送付したいので田村宛に後日 2

部送るよう付け加えられていた。

このような経過で、カナダのバンクーバーに 2 人の地方委員が就任した。2 月 13 日には、田村商会の金子民三郎が、正富と同様に同地での寄付金を取次ぎ 10 円を送金し、その内訳は長尾コマ子 6 円、長嶺源子と西原藤右衛門が各 2 円で、『新岡山孤児院』と『同院新報』の送付を求めてきた。その後、5 月 26 日に長嶺と山本コマより賛助金 24 円と臨時寄付金 33 円 76 銭の計 57 円 76 銭および新賛助員 12 人が報告され、その氏名も確認できた。このうち、臨時寄付金は、宮崎てる子取次で 9 人より 2 円 60 銭、米国移民検査長デービーシーより 10 円、長嶺と山本の取次で 15 人より 10 円 16 銭であった。29 日には、金子民三郎取次で 5 人等より 11 円と、晚香坡ホテルの桑島俊取次で 22 人より 15 円 40 銭が送金されてきた。

また、山本コマは、5 月 5 日にも、帰国する森平鎌太郎医師にハンカチーフ他 6 品と 59 銭 9 厘を託して、横浜市の地方委員中野英一郎から送付されたことが確認できた。なお、森平の話によると、山本は同地で料理屋兼旅館を開業し、宿泊客の落し物を集めて寄贈したものであった。さらに、正富壽も、5 日に米国モンタ州ハーバー市より 10 円 80 銭を取次ぎ送金してきた。26 日には、長嶺と山本より、賛助金と寄付金等 57 円 76 銭が寄贈され、この寄附金の中に「一大家族の母」からの寄付あったことが記されていた。

7 月 3 日にも、長嶺と山本から臨時寄付金と賛助金 12 弗 15 仙が送付されてきた。このうち賛助金は 8 円で、新賛助員に 4 人が加入し、臨時寄付金は小林抱勝取次で 13 人から 8 円 30 銭、大屋よう取次で 7 人より 2 円 20 銭、山本コマ 5 円、無名氏 20 銭の計 15 円 70 銭であった。また、5 日には、神戸市に着港したインプレス・オブ・ジャパン号の乗組員の浅岡保太郎外 3 人より 4 円の寄付金が送金されたが、これはバンクーバーの「或友人」より「貴院ノ事情」を聞いて寄付金を送金したと記していたことか

ら、長嶺、山本もしくは正富の啓蒙によるものと理解できた。

9月15日には、長嶺と山本から『同院新報』が全く「不着」との書簡が届いた。その書簡によると、5月の寄付金計10弗80仙、賛助金(年1弗)計11弗、『同院新報』売却代80仙、今後の『同新報』の送付代5弗の合計27弗60仙を、5月5日バンクーバー港出航のシーピーアール会社汽船のエムプレス・オブ・チイナ号で送金し、6月にも寄付金計5弗25仙、賛助金4弗、外に山本の実母の17回忌の供養として2弗50仙の合計11弗75仙を、6月15日同港出航の同社汽船の同ジャパン号で送付した。しかし、『同新報』が全く送付されず、先の寄付金等が同院に届いているかが確認できず、寄付を受けた賛助員に『同新報』を配付できず、今後の寄付金募集にも不都合であるという主旨であったため、長嶺等の活動が再確認できた。

同時に、同院では「直チニ返書」を「英領カナダ、ヴァンクーバ市コロムビア街二百十七番邸」の長嶺と山本宛に送付したことから、長嶺らへの賛助金や寄付金の受領などの回答がなされていなかったことが判明し、急遽返信したことが確認できた。これは、同院の賛助員等の業務が膨大にあり、地方委員への返信が遅れていたためと理解できた。

そして、12月22日には、長嶺と山本がクリスマスのために32円92銭を送金してきたことから、『同新報』等がバンクーバーにも送付されるようになり、同地での地方委員としての活動を継続していたことが理解できた。

以上のように、地方委員は、カナダと全国の40道府県の169市区町村に403人の地方委員が分布していたが、実際に活動していたのは、岡山県6町5村11人、北海道3区1町2村6人等で、青森県2市1村4人、福島県1町1人、神奈川県1市1町4人、東京府1市1人、栃木県1市1町3人、茨城県1市1人、新潟県1市2町4人、富山県1市2人、石川県1市4人等、福井県1市1町2人、長野県1市3町4人、岐阜県1市1町2

人、静岡県 1 市 1 町 2 人、愛知県 1 市 1 人、滋賀県 1 市 3 町 5 人、京都府 1 市 1 人、大阪府 2 市 1 町 3 人、兵庫県 2 市 7 町 1 村 16 人、奈良県 1 市 1 人、和歌山県 1 市 2 町 3 人、鳥取県 1 市 1 町 2 人、島根県 2 町 2 人、広島県 1 市 4 人、山口県 1 市 5 町 3 村 10 人、徳島県 1 町 1 人、香川県 2 市 4 人、愛媛県 2 市 4 町 2 村 10 人等、高知県 1 市 1 町 1 村 3 人、福岡県 3 市 3 町 8 人、佐賀県 1 市 1 町 2 人、長崎県 2 市 5 人、熊本県 1 市 1 町 2 人、大分県 1 町 1 人、宮崎県 6 町 1 村 8 人、鹿児島県 1 市 1 人、カナダのバンクーバー 2 人で、合計 2 国 37 道府県 41 市 3 区 57 町 16 村の 146 人他の地方委員が、合計 3,134 円 39 銭を送金したことが確認できた。これは、同年の全賛助金 6,948 円 96 銭の 45.1%に達し、総収入 24,300 円 68 銭 3 厘の 12.9%を占める重要な財源であったことが確認できた。このため、地方委員が、岡山孤児院と賛助員の結節点となり賛助金などを集金（募集）する全国的な支援ネットワークシステムが具体化し、同院の財政にとっても重要な役割を担っていたことが確認できた。なお、地方委員の寄附金の取次などは、他にもあったが紙面の関係で主なる事例の紹介となり、今後の調査課題になることを付記しておく。

#### 4) 賛助員や地方委員の慈善事業に対する認識の一端

最後に、(4) 個々の賛助員と地方委員が、どのような考え方で岡山孤児院への支援を実施していたかの一端を、彼らが賛助金等と一緒に送付してきた書簡を用いてその内容を解明し、慈善事業に対する認識としての価値感（観）の在り様を分析していくことにする<sup>24)</sup>。

1 つ目の書簡は、1 月 13 日に福岡県柳河町の地方委員の笹尾昇造の取次で、同町城内村の関屋藏造の手を経て 4 人の子どもより米 1 俵分の寄付金 3 円 50 銭が送付されることになった時の、関屋の書簡である。この書簡を書いた関屋は、冒頭で「先月分相積り次第早々送附可仕候間」とあることから賛助員と理解できた。その関屋が、先の 4 人の子ども達が岡山孤児

院に寄付をする経過を記し、それを要約すると次のようになった。

「当地方委員ノ一人」で兼ねてより「同情の厚き方より四人の子供等」へそれぞれ「慈善の道を教えられ」、このことが本年も、立花千里 18 歳、同秀樹 17 歳、同タマ 15 歳、同セキ 12 歳の 4 人から 12 月 31 日に米 1 俵分の 3 円 50 銭を受け取ったので、同院に送付するという主旨であった。

そして、これを取次いだのが、笹尾地方委員であったため、4 人の子ども達へ「慈善の道」を説いたのは笹尾で、関屋はその笹尾を「同情の厚き方」と認識していたことが理解できた。このため、笹尾も同情の厚さが「慈善の道」であると認識し、その価値感を 4 人の子ども達に説き（啓蒙し）、同院への寄付行為に結びついたことが理解できた。このため、地方委員の笹尾も、賛助員の関屋も、そして 4 人の子ども達も同情の厚さが「慈善の道」であるという価値感（観）を認識または意識していたと分析できた。

2 つ目の書簡（2 月 21 日付）は、周防町の私立周陽学校（佐波郡立周陽学校）の学生の桜武生が寄付金を送金してきた時の書簡である。桜は、2 年前の 1900 年 3 月 16 日、17 日の三田尻村で開催した同院の音楽幻燈会の時に賛助員への加入を約束したが、貧乏学生のため送金できずにいたが、貯金をしてやっと 30 銭を送付してきた。桜が、なぜ賛助員に加入したかという、同幻燈会での幻燈画を通して同院の様子や「孤児御養育」の 1 つ 1 つの詳細な説明を見聞して「誠に感激」して啓蒙を受け、利己的な人物が世の中に多い中であって、ひとり「貴院にハ他に率先して可憐なる孤児教育に御熱心」で、「誠に慈善なる貴院の御志」に感服し、「関心の極」みに達し新賛助員に加入することを約束したのであった。

しかし、その後毎月 10 銭を送金すべきであったが「貧書生」のため送金できずにいたが、1 週間に 1 銭ずつ貯金をすることを定め、今回 30 銭が貯まり郵券で送金するので、孤児の養育費に使用してくださいという内容であった。また、今後も貯蓄できた時に送ると記していた。

このため、桜は、同院の同幻燈会を参観し、同院が「率先して可憐なる



孤児」の教育を熱心に実施することが「誠に慈善なる」の志と意識できるように、桜自身もその志を新賛助員に加入することで具体化しようとしたと理解できた。ただし、貧乏学生で毎月 10 銭を送金することができずにいたが、その彼が自分にできる新たな実践方法として 1 週間に 1 銭ずつ貯金する方法を生み出し、その結果 30 銭を同院に送り、今後も貯蓄して送金すると報告して来たことが重要であると判断できた。つまり、桜が、少ない生活費を削減して寄付金を捻出するには、日々の生活の中で常に「岡山孤児院の孤児教育」を認識しながら儉約に努めることになり、そのような意味では生活に余裕のある人からの寄付金よりも、同院への共感力が深くなると解釈でき、その共感力を基盤とした寄付行為の中に「誠の慈善」の志を自主的、主体的に具体化した事実が理解でき、この事実は彼の内面における「慈善」に関する価値意識（価値感）を価値認識（価値観）へと発展していく過程と判断できたからである。

3 つ目は、福井県鯖江町の井阪藝からの、子どもの賛助員への入会と亡父の命日を「記念」しての寄付に関する書簡である。井阪は、子どもが同院の事業を長く賛助するために、子どもの名義で賛助員への加入を申請し、かつ、3 月 15 日が亡父の命日のため、それを「記念」して計 2 円を為替で送付してきた。この内容から、鯖江町という遠方の一民衆が、最も大切な我が子が将来岡山孤児院（慈善事業施設）を支援するような子どもに育つことを祈願し、かつ亡父の命日に対する「記念」として寄付したことが理解でき、岡山孤児院という慈善事業への敬意という価値認識（価値観）が理解できた。実は、このような、我が子の誕生や肉親の追善などを記念しての寄付行為が他にも多数確認でき、岡山孤児院という慈善事業への敬意という価値認識（価値観）の全国への広がりが推定できた。

4 つ目の書簡は、10 月 9 日、10 日に京都市で地方委員の辻慶三郎などが中心となり、京都慈善音楽幻燈会が開催したが、それを参観した賛助員の武山英子が、在京中の佐藤惣吾事務員を訪ねて 10 円の寄付金と書簡を

渡したが、その書簡の内容である。武藤は、同幻燈会で同院の歴史を「拝見」して「感涙」し、自らも「國のためにと貧兒教育を志し」たが資金がないため断念し、今回教育事業に従事していた時に得た資金を同院の教育費へ寄付するという主旨であった。この内容から、慈善事業を志す武藤は、自らの志を岡山孤児院の慈善事業に託していたことが理解でき、賛助員の中には慈善事業への志を具体化できなかった者やその志を目指す者など、同院の賛助員募集を含む実践が、全国各地の慈善事業を具体的に培う土壌にもなっていたと仮定できたことである。

## 2 1903 年の賛助員募集活動の展開とその実態

### 1) 1903 年の賛助員募集活動の概要

#### (1) 総賛助員数と新賛助員数の推移

1902 年 12 月末に 10,449 人に達した賛助員数が、1903 年にどのように推移するかをまとめると表 9 のようになった<sup>25)</sup>。つまり、1 月の新賛助員が 231 人加入し、合計 10,680 人となったが、退員する者が 187 人いたため、1 月末の総数は差し引き 10,459 人であった。このうち、岡山孤児院（本部）に賛助金を直接送金する者が、1,922 人で、外部運動員と地方委員等が集金する賛助員が 8,437 人と全体の 81.4% を占めたため、外部運動員や地方委員等による集金が重要であることに変わりがなかった。次いで、

表 9 1903 年の月別の総賛助員数と新賛助員数の推移

	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
前月末現在数	10,449	10,459	10,222	10,222	9,916	9,777	9,652	9,534	9,570	9,801	9,842	9,796
本月加入者数	197	167	223	184	175	133	107	180	281	112	16	292
本月加入者合計	10,646	10,626	10,445	10,406	10,091	9,910	9,759	9,614	9,851	9,913	9,858	10,088
本月退員数	187	404	223	490	114	258	225	44	50	71	62	477
本月末現在総数	10,459	10,222	10,222	9,916	9,977	9,652	9,534	9,570	9,801	9,842	9,796	9,611
本月一種総数	1,922	1,924	1,994	1,854	1,851	1,823						
本月二種総数	8,437	8,098	8,028	7,852	7,926	7,829						

2 月の新賛助員は 167 人、3 月 223 人、4 月 184 人、5 月 175 人、6 月 133 人、7 月 107 人などと増減を繰り返し、8 月以降も 180 人、9 月 281 人などと同様の傾向が見られるが、11 月のみ 11 人と激減している。その合計は 2,067 人となり、月平均 172 人程度であった。

一方、退員者が合計 2,605 人いたため、12 月末現在の総賛助員数は 9,611 人と 1 月末よりも 848 人も減少してしまった。その要因は、前年と同様に、住所不明や賛助金未納者などを「年末調査削除」により除いたため、この年は新賛助員 2,067 人に対し、退員者が 2,605 人とトータルとして 538 人減少しているが、こうした苦境をどのようにして乗り越えようとしたのかを解明していく。その際、「新賛助員の募集活動の概要」を示した上で、職員による賛助員募集活動及び特徴的な地方委員における集金活動などの内容をまとめて行くことにする。

## （2）新賛助員の募集活動の概要

1903 年の新賛助員の月別の募集活動の推移は、表 9「本月加入者数」に示したが、その道府県別の月別加入者数をまとめると、表 10 のようになる<sup>26)</sup>。毎月の加入者を「本部」と「地方」に分けて表示したが、これは『岡山孤児院新報』に同院自身が 2 つに分類して記載していたからであった。それは、大きく「本部」を「第一種」、「地方」を「第二種」に分け、「第一種」の中に毎月 10 銭を寄付する者と毎年 1 回 1 円を寄付する者がおり、「第二種」の中にも同様の者がいたが、表 10 では両者を合算した人数を示した。

そして、1903 年の道府県別の新賛助員の加入分布は、北海道から沖縄までの、秋田県と埼玉県を除く 45 道府県から 2,067 人が加入していたことが明らかになった。

このうち、北海道は 9 月 259 人、10 月 58 人など計 387 人と前年度の 31 人を大きく上回った。東北地方では、青森県 5 人、岩手県 1 人、宮城県 2 人、山形県 1 人、福島県 1 人と少数だが、地域的な拡がりを示す結果と

表 10 1903 (明治 36) 年 1 月からの各月別各府県別の新賛助員の加入人数

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		合計
	本部	地方	本部	地方	本部	地方	本部	地方	本部	地方	本部	地方	本部	地方	本部	地方	本部	地方	本部	地方	本部	地方	本部	地方	
北海道	2		3	1											53		22	237	46	12	1	5	2	8	387
青森県																									5
岩手県																									1
宮城県							1						1						1						2
秋田県																									0
山形県							1																		1
福島県																							1		1
栃木県														1											1
茨城県													4												4
群馬県							1																		1
埼玉県																									0
千葉県							1																6		7
東京都		3						1	2		1		1					3		1		1	17	31	
神奈川県			3			1	16				1												5	26	
新潟県	1												1					1					3	6	
富山県													2											2	
石川県			1										1										2	5	
福井県	1	1											1		1									3	
山梨県							1	1															1	2	
長野県			1			1	1										2			1			5	11	
岐阜県					1		1																	2	
静岡県								4															2	6	
愛知県	1								14				1										3	19	
三重県	1																						2	3	
滋賀県		2				2			2			1	1					2					13	23	
京都府	2						3						2				1						15	29	
大阪府		1			2		2		1														3	16	
兵庫県		1	1		6		1		29	1	55	3	30				2	1	5	27	9		6	17	193
奈良県	1																							1	2
和歌山県							1			1	25		2									1	8	38	
鳥取県							1						2										5	38	
島根県									9				1			12							4	5	
岡山県	5	26	6	14	16	3	4	6	2	8	1	5	1	11	2	2	1	3	4	6		3	87	220	
広島県	1	8	1	5	18	3	3	3	99			2		43			1						2	190	
山口県		10		1	5	12	6	93	2	4			8	28		3		5					13	190	
徳島県								1				3												4	
香川県				9				3			1	18						2				1	5	39	
愛媛県	2	16	1		18	1	1		1				1	4		1		2				1	17	65	
高知県		1			1									4									7	13	
福岡県					66	68	4	12	1	2		7					2						24	186	
佐賀県									1								1						3	5	
長崎県			1										6		1								3	11	
熊本県												3		1									5	9	
大分県			5		1				2		1												3	12	
宮崎県		2	4				7	1				1											15	30	
鹿児島県	1					1								1										3	
沖縄県									1															1	
軍艦吉野							1																	1	
軍艦松島																			1					1	
大日本軍艦																								3	
韓国・京城																								197	
台湾			1		1		1							1										1	
台北県	2		1																					1	
台南																								2	
米国	1																	1						1	
清国・天津										2			1					1						4	
総数	21	76	28	38	90	136	33	146	16	168	10	133	26	135	57	23	31	260	79	33	7	14	507	2067	

(注) 空白は人数がゼロである。12 月の欄は集計時に本部と地方の区分けがなされていないので合算数値とした。  
(『岡山孤児院新報』第 75 号から第 86 号附録より作成)

なっており、関東地方では、東京府が 31 人と最多で、神奈川県 26 人、千葉県 7 人、茨城県 4 人、栃木県 1 人、群馬県 1 人と続いた。このうち東京府では、1 月 3 人、12 月 17 人、神奈川県では 4 月 16 人、12 月 5 人が多かった。

中部地方では、愛知県が 19 人で最多となっており、次いで、長野県 11 人、新潟県及び静岡県各 6 人、石川県 5 人、福井県及び三重県各 3 人、山梨県、富山県、岐阜県各 2 人と続いた。

近畿地方では、他の地域に比べて、賛助員募集活動が活発的に行われていたことが窺え、具体的には、兵庫県が 193 人と最多で、和歌山県 38 人、京都府 29 人、滋賀県 23 人、大阪府 16 人、奈良県 2 人と続いていた。

中国地方でも総じて新賛助員数が多く、岡山県が 220 人と最多で、次いで、広島県及び山口県各 190 人、鳥取県 38 人、島根県 5 人となっていた。

四国地方では、愛媛県 65 人、香川県 39 人、高知県 13 人、徳島県 4 人の順になっており、九州地方では、福岡県が 186 人と断トツに多く、宮崎県 30 人、大分県 12 人、長崎県 11 人、熊本県 9 人、佐賀県 5 人、鹿児島県 3 人、沖縄県 1 人と続いていた。

因みに、この年は、軍艦（軍艦吉野、軍艦松島、大日本軍艦）に乗船する海軍少佐や上等兵の活動と参加が目を惹き、軍関係者の影響をも看過できない。そして、海外からの新賛助員への加入も見られ、その総数は 214 人であり、具体的には、韓国・京城 198 人、台湾 5 人、台北県及び清国・天津各 4 人、台南 2 人、米国 1 人となっていた。つまり、軍関係者の影響に加え、隣国の韓国・京城からの加入の多さの要因や背景（事情）をさらに究明することが求められよう。

以上のように、各道府県の月別の新賛助員の加入者数の推移から、若干の増減の起伏が見られるものの、概して特定の道府県の特定の月の加入者数が集中して増加している様相が窺えた。この傾向や地域的偏重をもたらしした要因についてもさらなる掘り下げが求められた。

## (3) 賛助金の収支と全収支に占める割合

1903年1月から12月までの月別の賛助金の収支とその全収支に占める割合をまとめると表11のようになる<sup>27)</sup>。つまり、1月の賛助金収入は、1,093円21銭であったため、全実収入（繰越金を除く）1,936円10銭の56.4%（以下、括弧内）を占める重要な収入であった。2月はさらに増大し、1,180円46銭（84.2%）となったが、3月からは676円61銭（24.0%）と急減し、4月466円28銭（44.6%）、5月417円98銭（27.3%）、6月351円70銭（29.8%）、7月261円50銭（60.5%）、8月239円60銭（37.6%）、9月201円17銭（9.5%）、10月129円52銭（6.1%）、11月179円10銭（11.7%）、12月450円35銭（3.1%）と推移した。

このような傾向の下で、1年間の全賛助金収入は5,647円48銭となり、月平均は470円62銭になった。これは、昨年<sup>28)</sup>の全賛助金収入6,948円96銭より、1,301円48銭の減額となり、1902年に続き、今年も賛助金の収入において減少傾向が続いていたことが確認できた。そして、1903年の

表11 1903年の月別の賛助金収支と全収支に占める割合

	1月	2月	3月	4月	5月	6月
①賛助金収入	1,093.210	1,180.460	676.610	466.280	417.980	351.704
賛助金の割合	56.4	84.2	24.0	44.6	27.3	29.8
全収入(繰越金除く)	1,936.100	1,400.500	2,817.500	1,043.200	1,530.995	1,177.800
②賛助金集金費	93.522	131.718	50.765	51.326	63.125	35.055
同集金の割合	6.1	4.7	3.0	3.6	4.2	2.0
全支出	1,532.664	2,761.901	1,655.239	1,422.982	1,518.128	1,747.740
①－②	999.688	1,048.742	625.845	414.954	354.855	316.649
	7月	8月	9月	10月	11月	12月
①賛助金収入	261.500	239.600	201.170	129.520	179.100	450.350
賛助金の割合	60.5	37.6	9.5	6.1	11.7	3.100
全収入(繰越金除く)	432.200	636.000	2,109.100	2,120.400	1,526.979	14,178.870
②賛助金集金費	177.318	146.996	106.197	96.820	61.265	126.821
同集金の割合	9.6	0.9	3.8	5.6	3.5	0.900
全支出	1,837.078	15,308.050	2,813.400	1,730.210	1,746.350	13,575.550
①－②	84.182	92.604	94.973	32.700	117.835	323.529

総賛助金収入は 5,647 円 48 銭 4 厘であり、これは同年の総収入額 30,909 円 64 銭 4 厘の約 18.3%であった。

こうした具体的な数値化と数値上の減少傾向から、単純に人々の意識や協力者の協力度合いが低下したと断定できず、むしろここでは、地域差を考慮しながら、低迷地域への応援などの動きがあったと推察される。こうしたなか、1903 年にどのような集金活動が展開されていたのかを解明することが課題となった。そこで、次節では職員による賛助員募集活動の内容を具体的に見ていく。

## 2) 職員による賛助員募集活動の内容

1903 年の賛助員募集活動を担当した職員（出張員、集金人を含む）の月別の集金状況をまとめると、表 12 のようになる<sup>28)</sup>。まず、本部直接収入を見てみると、1 月から 12 月にかけて、平均 75 円 9 銭の収入があり、これを同年の月別の全賛助金収入に占める割合で見えてみると、2 月 84.2% (96 円 44 銭)、7 月 60.5% (41 円 90 銭)、1 月 56.4% (144 円 66 銭)、4 月 44.6% (72 円 63 銭)、8 月 37.6% (33 円 80 銭)、6 月 29.8% (39 円 61 銭)、5 月 27.3% (68 円 2 銭) の順になっていた。

次に、職員による月別集金額が 50 円以上と目覚ましい成果を挙げたケースを見ていくと、京都出張員の佐藤は 1 月に 485 円 30 銭、2 月に 236 円 10 銭を筆頭に、大阪出張員の佐藤は 3 月に 126 円 90 銭、2 月に 84 円 80 銭のほか、岡山集金人の草地は 2 月に 121 円 5 銭、3 月に 73 円を、横浜出張員の佐久間は 3 月に 89 円 20 銭を、福山出張員の草地は 4 月に 66 円 40 銭を、尾道出張員の草地は 3 月に 62 円 40 銭を、津山出張員の草地は 1 月に 54 円 95 銭を、今治出張員の大島は 11 月に 51 円 50 銭を、という具合に、概して 1 月から 3 月にかけての額が比較的高く、岡山県（岡山市、津山市）、広島県（福山市、三原市など）、香川県（高松市、多度津町、善通寺市など）など、中国・四国地方を中心に集金活動に勤しんでい

た草地や、山口県、福岡県（福岡市、久留米市など）、大分県（中津市）、佐賀県、長崎県など、九州地方を主に駆け回った佐久間ら、出張員や集金人の活躍ぶりが目を惹いた。

さらに、当時の日本が統治していた韓国（京城市、仁川市、釜山市）に出張した入江、光延らの活躍も見られ、韓国だけで計 68 円の集金があり、数値としてはそれほど芳しくないものの、後述する音楽活動写真隊の韓国での開催に同行し、在留邦人などから集金したことが理解できた。

### 3) 地方委員による賛助金の月別集金状況

1903 年の地方委員による賛助金の月別集金状況を示したものが表 13 である<sup>29)</sup>。まず、地域別に見てみると、近畿地方 378 円 40 銭が最多となっており、次いで、九州地方 253 円 90 銭、四国地方 200 円 40 銭、北海道 197 円 12 銭、岡山県 178 円、中部地方 169 円 10 銭、東北地方 147 円 90 銭、中国地方 146 円 30 銭、関東地方 130 円 10 銭、諸外国 100 円 16 銭となっていた。このうち、合計額が多かった近畿地方に注目してみると、15 円以上の集金を達成したケースとして、神戸地方委員の田村（1 月 77 円 30 銭、3 月 24 円 10 銭）のほか、尼崎地方委員の小森（3 月 23 円）、明石地方委員の中西（6 月 21 円）、神戸地方委員の浦木（4 月 16 円 80 銭）などが挙げられ、総じて、神戸市、西宮市、明石市などを中心として、上半期（1 月から 6 月）における集金活動が活発であった。

他方、九州地方でも比較的に募金活動が展開され、ここでも 15 円以上の集金額に至ったケースを見てみると、長崎地方委員の大島（8 月 25 円 50 銭）、小倉地方委員の柴田（6 月 21 円）、若松地方委員の宮本（6 月 20 円）などが挙げられ、高額ではないものの、福岡県から熊本県までの地方委員が広く集金していたことが分かる。

そして、1903 年の地方委員による賛助金総数額は、1,901 円 38 銭となり、これはこの年の総収入 5,647 円 48 銭 4 厘の約 33.7% に該当した。一



方、1902 年の同様の割合は 45.1%となっており（地方委員による賛助金総額は 3,134 円 39 銭。全収入額 6,948 円 96 銭）、ここから割合的には減少傾向が見て取れるが、それでも 1903 年においても貴重な収入源の一つとなっていた。

以上から、地方委員による集金活動は、その成果が著しかった地域や月などある中で、集金活動が継続的に行われていた地域のあることが理解できた。このため、その継続要因や普及要因を精査していくという課題も明らかになった。

#### 4）音楽幻燈（活動写真）隊での新賛助員募集と新地方委員の就任

1903 年 3 月から（1905 年 12 月頃まで）は、音楽幻燈（活動写真）隊による全国的な巡回運動が 2 巡目に入り、北海道、関東、東北、中部、九州北部、近畿から北陸地方へと巡回がなされた時期であった。また、これに加え、韓国へ 2 回、台湾へ 1 回派遣され、同隊としては海外での最初の活動となった。これは、当時の日本が日清戦争（1894 年 -95 年）により台湾を領有し、韓国も日本の勢力範囲となり、日露戦争（1904 年 -05 年）に勝利したことで韓国は日本の属国化し、完全な外国ではないという国際情勢のなかでの巡回運動を実施したからであったことも頭に入れておく必要がある。

同幻燈（活動写真）隊では、音楽隊員の演奏と幻燈や活動写真により岡山孤児院の歴史と現況を上映し、寄付金等や新賛助員を募集し、発起人等のなかから地方委員が就任し、同院への継続的な支援ネットワークシステムが構築されていたことは既述した。このような同幻燈（活動写真）隊の巡回運動そのものは別稿で再考することとし、ここでは 1903 年の同隊の同幻燈（活動写真）会の開催月日、開催地、寄付金収入、新賛助員（新賛）および地方委員に就任した人物をまとめと表 14 のようになる<sup>30)</sup>。

また、1903 年は、音楽幻燈隊から音楽活動写真隊へと、幻燈に加え新

表 14 1903 年の音楽幻燈（活動写真）会の開催地等と新賛助委員数や新地方委員

開催月日	開催地	寄付収入	新賛	新地方委員氏名
1/11,12	岡 玉島町	242.946	71	大野友松、中原克一郎、小野節
2/1,3/7,8,9	福 門司市	996.83	121	
3/13,14	山 下関市	533.92	0	
3/16,17	小倉市	610	64	
4/23,24	福岡 筑前若松町	338.005	87	
4/27,28,29	福岡 筑前枝光	255.14	27	
4 月 30 日	山 山口町	476.153	61	
4/2,3	広 備後三原・糸崎	118.14	21	
4 月 22 日	山 周防岩国町	92.115	67	
5/6,7	広 広島市	507.325	54	
5/25,26	兵 明石町	300	64	
5/28,29,30	岡 岡山市	1,311.40	80	
6/4,5	香 高松市	235.374	97	
6/12,13	兵 生野町	269.812	157	
6/14,15	岡 備中笠岡町	172.47	74	
6 月 25 日	和 和歌山市	531.75	181	
7/18,19	備中成羽村	81.365	103	
7 月 21 日	岡山 吹屋町	201.064	105	長尾豊吉
7/24,25	高粱町	314.768	90	金澤長蔵、藤井千代太郎
7/28,29	大 堺町	155.912	51	
8/11,12	函館区	971.085	70	
8/21,22	夕張村	127.88	25	
8/25,26	旭川町	395.729	123	
9/1,2	札幌区	729.07	65	
9 月 9 日	北海道 栗山村	137.5	37	
9/14,15,16,17	室蘭町	363.82	14	
9/20,21	西紋警	147.85	51	
9/20,21	余市町	134.65	0	大堀俊太郎
9 月 25 日	小樽区	631.325	67	
9 月 25 日	寿都町	155.5	42	齋藤純一郎
10/4,5	岩見澤村	231.231	57	
10/10,11	兵 龍野町	130.666	63	
10/19,20	庫 姫路市	433.8	39	
10/24,25	岡 備中倉敷町	423.511	0	
11/4,5	山 庭瀬撫川町	153.97	135	
11/14,15,16,17,18,19	釜山	900.69	65	船曳正三、五味恵次郎、豊田歌子
11/24,25,26,27,28,29	韓国 京城	704	13	長谷川金次郎、高木正義、富田耕司、中村忠吉、藤信夫、田端正平、豊田福太郎、林虎之助、豊田邦吉
12/4,5	仁川	1,205.37	131	
12 月 19 日	岡 総社町	340.776	108	

(『岡山孤児院新報』第 75 号から第 86 号より作成)

たに活動写真を上映するのは同年 8 月の北海道巡回からであった。同時に青年音楽隊から少年音楽隊に移行したのもこの時であり、その後は複数の音楽隊の養成が本格的に取り組まれた。このような変化のなかで、1903 年は 41 箇所 で 89 日間音楽幻燈（活動写真）会を開催し、総額 15,782 円 73 銭 6 厘の寄付金を募集し、1 ヶ所平均 383 円 62 銭 7 厘と多額の寄付金が集まった。1 ヶ所での開催でもっとも高額の寄付が集まったのは韓国仁川の 1,205 円 37 銭 1 厘であり、より詳細に見てみると、この年の同幻燈（活動写真）会の寄付金収入が 500 円を超えていたのは、岡山市 1,311 円 40 銭（5 月 28 日 -30 日）、仁川 1,205 円 37 銭（12 月 4 日 -5 日）、門司市 996 円 83 銭（2 月 1 日、3 月 7 日 -9 日）、函館区 971 円 8 銭 5 厘（8 月 11 日 -12 日）、釜山 900 円 69 銭（11 月 14 日 -19 日）、札幌区 729 円 7 銭（9 月 1 日 -2 日）、京城 704 円（11 月 24 日 -29 日）、小樽区 631 円 32 銭 5 厘（9 月 25 日）、広島市 507 円 32 銭 5 厘（5 月 6 日 -7 日）の 9 ヶ所で、そのうちの 3 ヶ所は韓国での実績であった。

そして、1903 年 1 月 11 日から 12 月 19 日までに行われた音楽幻燈（活動写真）会を通じて得られた新規賛助員数は、表 14 のように 2,680 人となり、これは同年の総賛助員 9,777 人の約 27.4% に該当した。このことから、約 3 割近くの新賛助員を獲得したのは音楽幻燈（活動写真）隊による巡回運動が担っていたことが確認できた<sup>31)</sup>。

また、音楽幻燈（活動写真）会の開催により、発起人等から新たに地方委員が次のように就任した。玉島町（1 月 11 日 -12 日）での開催後には、大野友松、中原克一郎、小野節の 3 人が就任し、その後長尾豊吉（吹屋町での開催後、7 月 21 日）、金澤長蔵、藤井千代太郎（高梁町での開催後、7 月 24 日 -25 日）、大堀俊太郎（余市町での開催後、9 月 20 日 -21 日）、齋藤純一郎（寿都町での開催後、9 月 25 日）が就任した。ただ、新地方委員が就任していない開催地が大半であったが、これは 1902 年までの音楽幻燈隊の巡回運動の際にすでに地方委員が就任していたため、今回の開

催では新地方委員の就任がなかったためと理解できた。さらに、今年の新地方委員の中で、11月に開催された韓国での音楽活動写真会での新地方委員の就任がもっとも顕著な結果となった。具体的には、釜山での開催後（11月14日-19日）に、船曳正三、五味恵次郎、豊田歌子の3人が、京城でに開催後（11月24日-29日）には、長谷川金次郎、高木正義、富田耕司、中村忠吉、藤信夫、田端正平、豊田福太郎、林虎之助、豊田邦吉の9人が就任した。このため、地元韓国の新聞記事（「社説」）において、同院の分院の設置まで議論が展開しており<sup>32)</sup>、新賛助員等の獲得が芳しくなかった状況下で、関係者によって一つの打開策として外地での活動が注目されたようであった。

## おわりに

本稿では、1902年と1903年の賛助員募集活動の展開過程とその実態を解明した。まず、数量的な内容を整理すると、賛助員総数は10,449人（1902年）から9,777人（1903年）へと1万人の大台を切る減少になっていたものの、獲得した新規賛助員数及びその割合で見ると、1902年では2,048人（新規割合17.4%）に対し、1903年では2,067人（新規割合21.1%）と大差はなく、新賛助員の割合が微増している。こうした賛助員数の動きに対し、実際に得られた集金総額を確認してみると、1902年が6,948円96銭で1903年は5,647円48銭と1,295円48銭の減少になっていた。さらに、地方委員による賛助金集金額を比較すると、1902年3,134円39銭（全額のうちの45.1%）に対し、1903年1,901円38銭（全額のうちの33.7%）となっており、地方委員による賛助金募集活動が低下していたことが分かる。このことから、賛助員総数や地方委員による賛助金集金額は減っていく傾向が理解できた。そこで、先のような両年の賛助員募集活動の実態を比較すると次の4点が指摘できる。

第 1 に、両年とも新賛助員数が減少傾向にあったため、総賛助員数がこれまでの右肩上がりの傾向から減少傾向に転じたことが指摘できることである。その原因は、1902 年の総新賛助員数が 2,048 人であったのに対し同年の「年度末調査削除」を含めた退員者が 3,039 人と、新賛助員より退院者が 991 人多くなり、翌 1903 年も総新賛助員数 2,067 人に対し退員者数 2,605 人と、538 人も減少しからであった。このため、1902 年の総賛助員数は 1 万人を維持していたが、1903 年 5 月時点で 1 万人を切り、同年 12 月末には 9,611 人になってしまった。

このことは単に、ある月以降の新賛助員数の減少傾向という動きを示すだけではなく、全収入に対する賛助金の割合の減少にも響いており（1902 年の場合は 6 月 [10.9%] 以降、1903 年の場合は 9 月 [9.5%] 以降、その傾向が顕在化している）、この間の賛助員募集活動を通じた運営の厳しさを物語る結果となった。だが、このような傾向が直ちに人々の意識低下や職員の活動低迷という問題として片付けられない複雑さが内包される。すなわち、その背後には 1903 年頃には全国各地にある程度既存の賛助員活動が根付き、音楽幻燈隊の誘致や職員による賛助金募集活動などが寄与していたからである。

第 2 に、新賛助員の加入者数が 1902 年と 1903 年とも多い県と、両年の間で増減の差が大きかった道府県があったことである。つまり、前者は、岡山県の 1902 年が 247 人（特に岡山市、津山市等）と 1903 年は 655 人（特に岡山市・津山市等）、兵庫県が 200 人（特に西宮市等）と 454 人（特に姫路市等）、広島県が 133 人（特に福山市等）と 468 人（特に尾道市等）などである。一方、後者は、1902 年では京都府（特に京都市など、220 人）、宮崎県（特に宮崎市・延岡市など、156 人）、熊本県（特に熊本市・八代市など、125 人）などの地方都市においての増加で、1903 年では東京都（特に東京市など、766 人）、北海道（特に札幌区など、487 人）などでの増加で、これらの道府県は大都市部であるという傾向がみられた。

第3に、このような傾向がみられた背景には、当時の賛助員募集を担当した職員の果たし得た役割が重要であったことが理解でき、一万人前後の賛助員体制を維持するためには不可欠であることが再確認できた。同時に、地方委員の存在が大きかったことも引き続き同様で、各地に地方委員がいることで社会的信用が上がり、音楽幻燈（活動写真）隊の巡回活動の開催にも貢献し、地方委員の活躍と音楽幻燈（活動写真）隊による活動の相乗効果があったと理解できた。

最後（第4）は、職員（出張員）や地方委員、音楽幻燈（活動写真）隊などによる賛助員募集活動を実施する中で、新賛助員数より退員者数が増加し、これまでの右肩上がりから、1902年の総賛助員数が1万人程に減少し、翌1903年5月時点で1万人を切り、同年12月末には9,611人になってしまった中で、賛助員の道府県別の賛助員総数の分布状況がどのようになっていたかということである。幸いにも、同年5月末時点の分布状況が確認でき、それをまとめると表15のようになった。つまり、同年5月末時点の賛助員総数は9,777人で、最も賛助員総数が多かったのは岡山県1,874人、次が東京府1,191人、兵庫県650人、大阪市522人、京都府508人、愛媛県404人と続き、最小は沖縄県の2人で、全47の道府県に賛助員が分布していた。さらに、欧米195人、台湾44人、韓国4人、清国2人と、日本以外の海外にも賛助員数が存在するまでに拡大していたことが確認できた。このため、当時の岡山孤児院の賛助員は、日本の全47道府県内の多数の市町村に分布し、同院を支援する全国的なネットワーク網が47道府県内の多数の市町村レベルで具体化していたと理解でき、かつ、そのネットワーク網は欧米、台湾、韓国、清国にまで拡大していたことが判明した。このように、同院を支援する全国的なネットワーク網が47道府県内の多数の市町村レベルで具体化していたことは、個々の賛助員およびその賛助員と同院の結節点となった個々の地方委員が、同院の活動から啓蒙を受けて同院を支援していたということであり、この事実の中

表 15 賛助員人員表（1903 年 5 月末調）

道府県名	人員	道府県名	人員	各府県名	人員
北海道	472人	富山県	36 人	山口県	180 人
青森県	132	新潟県	127	愛媛県	404
秋田県	4	長野県	199	香川県	209
岩手県	13	静岡県	101	徳島県	112
宮城県	22	愛知県	37	高知県	185
福島県	70	三重県	24	福岡県	329
山形県	9	岐阜県	23	大分県	29
栃木県	56	滋賀県	176	佐賀県	49
群馬県	34	京都府	508	長崎県	281
山梨県	8	奈良県	20	熊本県	142
神奈川県	206	大阪府	522	宮崎県	239
埼玉県	12	兵庫県	650	鹿児島県	69
千葉県	34	岡山県	1,874	沖縄県	2
茨城県	44	広島県	173	台湾	44
東京府	1,191	鳥取県	77	韓国	4
福井県	51	島根県	46	清国	2
石川県	170	和歌山県	181	欧米	195

〈注〉総計は 9,777 人。

（『第壹回評議会呈出書類』より作成）

に岡山孤児院という慈善事業施設に対する理解イコール慈善事業に対する認識を内在化していた賛助員が 9,777 人存在し、全国的なネットワーク網を形成していたということになる。この事実が、日本の社会福祉の歴史における慈善事業期の岡山孤児院の実践の歴史的役割の 1 つと仮定できた。

ただし、個々の賛助員と地方委員の、慈善事業に対する認識としての価値感（観）の内在化の在り様の十分な分析までには至っておらず、今後の研究課題となった。

さらに、海外へのネットワーク網の拡大の中で、台湾、韓国、清国への進出は日清戦争、日露戦争での勝利を通して属国化した国への拡大であり、そこに賛助員が存在した意味については慎重に検討する必要があると考える。

そして、これまでの右肩上がりから減少していく賛助員募集活動が、

1904 年以降どのように展開するかを、今後解明する必要がある。その際、全国的なネットワーク網を形成していた賛助員という慈善事業の輪が同心円状に拡がらず減少していく傾向の中で、賛助員募集活動を工夫して新たな戦略を取りながら、本部職員、外部運動（事務）員、地方委員、賛助員、音楽活動写真隊を総動員し、全国的なネットワーク網を生かしつつ、どのような活動を展開していくかを解明、分析していくことにする。

#### < 註 >

- 1) 菊池義昭、中嶋洋「岡山孤児院の賛助員の全国的な支援ネットワークシステムの構築過程とその歴史的役割－研究課題と時期区分を中心に－」『石井十次資料館研究紀要』第 20 号（2019 年 8 月）81 頁から 82 頁。
- 2) 以下 (5) 124 頁 26 行目までは、①同上「1900 年と 1901 年岡山孤児院の賛助員の全国的な支援ネットワークシステムの実態」『中京大学社会科学研究所』第 41 巻第 2 号（2021 年 3 月）103 頁から 192 頁を参照し、特に、「おわりに」（169 頁から 174 頁）はより正確性を期すため、加筆、修正した。

さらに、「1900 年と 1901 年岡山孤児院の賛助員の全国的な支援ネットワークシステムの実態」の表 10 には誤記があり、静岡市の森田弘道の合計が誤記で 46.000 が正しく、以下同様に、神戸市の鎌原政子 24.900、和歌山市の茨木正一 80.300、田辺町の伊藤貫一 32.100、御坊町の山本董一 9.000、広島市の吉見 8.600、鞆町の貫生税 5.800、高松市の増井嘉吉 75.65、松山市の祝田米太郎 16.700、延岡町の加藤馨之助 12.000 が正しい。さらに、1 月から 12 月までの各月の合計も誤記で、1 月 372.500、2 月 410.200、3 月 361.900、4 月 486.100、5 月 400.100、6 月 269.050、7 月 462.300、8 月 326.000、9 月 322.950、10 月 358.150、11 月 195.750、12 月 444.730 が正しく、月別の総計も 4409.730 が正解である。

- 3) 以下、表 1 を含めこの項の事実関係は、「賛助員加盟者人員」『岡山孤児院新報』第 64 号（1902 年 2 月 10 日、7 頁）、「同」『同』第 65 号（同年 3 月 10 日、8 頁）、「同」『同』第 66 号（同年 4 月 10 日、7 頁）、「同」『同』第 67 号（同年 5 月 10 日、7 頁）、「同」『同』第 69 号（同年 7 月 10 日、5 頁）、「同」『同』第 70 号（同年 8 月 10 日、7 頁）、「同」『同』第 71 号（同年 9 月 10 日、7 頁）、「同」『同』第 72 号（同年 10 月 10 日、7 頁）、「同」『同』第 73 号（同年 11 月 10 日、7 頁）、「同」『同』第 74 号（同年 12 月 10 日、6 頁）、「同」『同』第 75 号（1903 年 1



月 10 日、3 頁と 6 頁の間の欄外）より引用、参照した。

- 4) 以下、表 2 を含めこの項の事実関係は、「新賛助員 一月登簿」『同』第 64 号（7 頁）、「同 二月登簿」『同』第 65 号（7 頁、8 頁）、「同 三月登簿」『同』第 66 号（7 頁）、「同 四月登簿」『同』第 67 号（7 頁）、「同 五月登簿」『同』第 68 号（同年 6 月 10 日、7 頁、8 頁）、「同 五月登簿 前號の續き」『同 六月登簿』『同』第 69 号（5 頁）、「同 七月登簿」『同』第 70 号（6 頁、7 頁）、「同 八月登簿」『同』第 71 号（7 頁）、「同 九月登簿」『同』第 72 号（7 頁）、「同 十月登簿」『同』第 73 号（6 頁、7 頁）、「同 拾一月登簿」『同』第 74 号（6 頁）、「同 十二月登簿」『同』第 75 号（8 頁、3 頁と 6 頁の間の欄外）より引用、参照した。なお、以下「新賛助員」の表記は月登簿の用語を省略。
- 5) 以下、表 3 を含めこの項の事実関係は、「賛助寄附金 一月中」『同』第 64 号（7 頁）、「明治三十四年自一月至十二月決算報告」『賛助寄附金 二月中』『同』第 65 号（1 頁、7 頁）、「同 三月中」『同』第 66 号（7 頁）、「同 四月中」『同』第 67 号（6 頁、7 頁）、「同 五月中収入」『同』第 68 号（7 頁）、「同 六月中収入」『同』第 69 号（5 頁）、「同 七月中収入」『同』第 70 号（6 頁）、「同 八月中収入」『同』第 71 号（8 頁）、「同 九月中」『同』第 72 号（7 頁）、「同 十月中収入」『同』第 73 号（6 頁）、「同 拾一月中収入」『同』第 74 号（6 頁）、「同 拾二月中収入」『同』第 75 号（7 頁、8 頁）より引用、参照した。また、表 4、表 8 も上記の資料より作成したので、その際の註は省略する。
- 6) 以下、この項の事実関係は、2) の① 133 頁、「謹賀新年」『同』第 63 号（同年 1 月 10 日、1 頁）より引用、参照した。
- 7) 以下、この項の事実関係は、2) の① 118 頁から 132 頁、① 児嶋琥一郎編『石井十次日誌（明治三十四年）』（石井記念友愛社、1973 年 12 月）115 頁、② 同編『同（明治三十五年）』（同、1974 年 11 月）6 頁、9 頁、10 頁、③『明治三十五年一月中 日誌（岡山孤児院）』（カッコ内筆者加筆）1 月 8 日、1 月 17 日、1 月 18 日、1 月 20 日、1 月 23 日、1 月 24 日、1 月 29 日から 31 日、④『明治三十五年二月 日誌（岡山孤児院）』（カッコ内同）2 月 6 日、2 月 7 日、2 月 8 日、2 月 10 日、2 月 12 日、2 月 16 日、2 月 19 日、2 月 26 日、2 月 27 日、「横濱通信」「東京市賛助金報告」『同』第 64 号（5 頁）、「日誌 二月中」「横濱市に於ける慈善音楽幻燈會 出張員大西義一」「横濱音楽幻燈會寄附金」『同』第 65 号（3 頁から 7 頁）、菊池義昭「1899 年の岡山孤児院の音楽幻燈隊の巡回運動の実態（2）」『千葉・関東地域社会福祉史研究』第 45 号（2021 年 3 月、5 頁から 9 頁、32 頁から 41 頁）より引用、参照した。
- 8) 以下、この項の事実関係は、7) の① 115 頁、7) の② 7 頁、7) の③ 1 月 11 日、

1月16日、1月25日、1月31日、7) の④2月1日、2月2日、2月4日から7日、2月11日、2月12日、2月15日、2月26日、「小生儀出坂仕居り候……光延義民」「日誌 一月中」「大坂通信<sup>(ママ)</sup>」「京都賛助集金報告」『同』第64号(1頁、3頁から5頁)、「特別広告」「日誌 二月中」「大坂通信<sup>(ママ)</sup>」「新賛助員」『同』第65号(3頁、5頁、7頁、8頁)、「特別広告」「孤児の異動」「日誌 三月中」「新賛助員」『同』第66号(1頁、3頁、7頁)、「日誌 五月中」「丹波柏原町 事務員光延義民」「丹波佐治村 事務員光延義民」『同』第68号(5頁)、「日誌 十月中」「京都慈善音楽幻燈會報告 出張員大西義一」「新賛助員」『同』第73号(2頁から4頁、6頁、7頁)、①『明治三十五年三月 日誌(岡山孤児院)』(カッコ内同)3月1日、3月10日、3月26日、3月28日、3月29日、3月31日、②『明治三十五年四月 日誌(岡山孤児院)』(カッコ内同)4月4日、4月5日、4月8日、4月9日、4月11日、4月13日、4月15日、4月18日、4月21日、4月24日、4月27日、③『明治三十五年五月 日誌(岡山孤児院)』(カッコ内同)5月1日、5月2日、5月5日、5月7日、5月9日、5月10日、5月12日、5月20日、5月24日、④『明治三十五年六月 日誌(岡山孤児院)』(カッコ内同)6月12日、6月15日、⑤『明治三十五年七月日誌(岡山孤児院)』(カッコ内同)7月2日、7月3日、7月10日、7月14日、7月17日、7月29日、7月30日、⑥『明治三十五年八月 日誌 岡山孤児院』8月1日、8月4日、8月6日、8月27日、⑦『明治三十五年九月 日誌 岡山孤児院』9月1日、9月3日、9月8日、⑧『明治三十五年十月 日誌(岡山孤児院)』(カッコ内同)10月1日、10月15日、10月25日、⑨『明治三十五年十一月 日誌(岡山孤児院)』(カッコ内同)11月12日、11月16日、11月18日、11月23日、11月24日、柿原政一郎著『石井十次』(財団法人正幸会、1961年4月、39頁)より引用、参照した。

9) 以下、この項の事実関係は、7) の②19頁、7) の③1月6日、1月17日、1月11日、1月17日、1月24日、1月25日、1月27日、1月28日、7) の④2月17日、2月19日、2月27日、8) の①3月3日から6日、3月8日、3月9日、3月12日、3月18日、8) の②4月5日、4月6日、4月21日、「新賛助員」『同』第66号(7頁)より引用、参照した。

10) 以下、この項の事実関係は、8) の③5月4日、5月10日、5月20日、5月24日、5月25日、5月27日、8) の④6月9日、8) の⑤7月10日、7月13日、7月17日、7月23日、7月26日、7月31日、8) の⑥8月1日、8月6日、8月8日、8月13日、8月18日、8月20日、8月25日、8月31日、8) の⑦9月3日、9月5日、9月17日、9月19日、8) の⑧10月2日、8) の⑨11月11日、

11 月 21 日、11 月 25 日、①『明治三十五年十二月 日誌（岡山孤児院）』（カッコ内同）12 月 19 日、12 月 22 日、12 月 24 日、12 月 26 日、12 月 29 日、12 月 30 日、「美作津山音楽幻燈會 先発員佐久間武男」『同』第 74 号（3 頁）、「日誌（十二月中）」『同』第 75 号（5 頁）より引用、参照した。

- 11) 以下、この項の事実関係は、「新賛助員」『同』第 65 号（8 頁）、「新賛助員」『同』第 66 号（7 頁）、「新賛助員」『同』第 67 号（7 頁）、「新賛助員」『同』第 68 号（7 頁、8 頁）、「新賛助員」『同』第 69 号（5 頁）、「熊本市慈善音楽幻燈會」「新賛助員」『同』第 70 号（4 頁、6 頁、7 頁）、「新賛助員」『同』第 74 号（6 頁）より引用、参照した。
- 12) 以下、表 5（「新賛」は 4）より作成）とこの項の事実関係は、①菊池義昭「岡山孤児院の音楽幻燈（活動写真）隊の活動と養護実践のかかわりー研究の目的と全体的動向を中心にー」『共栄児童福祉研究』第 4 号（1997 年 3 月、87 頁から 99 頁）、②同「1899 年 8 月からの岡山孤児院の海外幻燈遊説隊の巡回運動とその周辺」『石井十次資料館研究紀要』第 22 号（2021 年 8 月、63 頁から 75 頁）、「新地方委員」『同』第 65 号（7 頁）、「東京慈善音楽幻燈會報告 出張員大西義一」「新地方委員」『同』第 68 号（1 頁、2 頁、7 頁）、「新地方委員」『同』第 70 号（6 頁）、「新地方委員」『同』第 71 号（7 頁）、「新地方委員」『同』第 72 号（7 頁）、「新地方委員」『同』第 73 号（6 頁）、「新地方委員」『同』第 75 号（3 頁と 6 頁の間の欄外）より引用、参照した。
- 13) 以下、表 6 とこの項の事実関係は、7) の② 28 頁、36 頁、50 頁、54 頁、8) の② 4 月 3 日、8) の③ 5 月 5 日、5 月 14 日、8) の⑤ 7 月 29 日、8) の⑥ 8 月 6 日、8) の⑦ 9 月 5 日、8) の⑧ 10 月 9 日、10 月 10 日、8) の⑨ 11 月 5 日、11 月 28 日、12) の① 85 頁から 87 頁、99 頁から 101 頁、「日誌 二月中」「新賛助員」『同』第 65 号（4 頁、8 頁）、「新賛助員」『同』第 66 号（7 頁）、「新賛助員」『同』第 68 号（8 頁）、「新賛助員」『同』第 69 号（5 頁）、「日誌 七月中」「新賛助員」『同』第 70 号（4 頁、7 頁）、「新賛助員」『同』第 73 号（7 頁）、「日誌 十一月中」「新賛助員」『同』第 70 号（2 頁、6 頁、7 頁）より引用、参照した。
- 14) 以下、表 7 は、2) の① 141 頁の表 9 に、「新地方委員」『同』第 64 号（6 頁）、「新地方委員」『同』第 65 号（7 頁）、「新地方委員」『同』第 67 号（7 頁）、「新地方委員」『同』第 68 号（7 頁）、「新地方委員」『同』第 70 号（6 頁）、「新地方委員」『同』第 71 号（7 頁）、「新地方委員」『同』第 72 号（7 頁）、「新地方委員」『同』第 73 号（6 頁）、「新地方委員」『同』第 75 号（3 頁と 6 頁の間の欄外）の新地方委員の各道府県内の市区町村別の人数を加算し作成した。また、この項の事実関係は、表 7 より引用参照した。さらに、表 8 は、5) の資料よ

り作成した。

- 15) 以下、この項の事実関係は、表7と表8、8)の③5月2日、8)の⑥8月6日、8月8日、10)の①12月24日より引用、参照した。
- 16) 以下、この項の事実関係は、表7と表8、7)の④2月3日、8)の②4月10日、8)の⑦9月3日、「日誌 二月中」『同』第65号(3頁)、「日誌 四月中」『同』第67号(3頁)より引用、参照した。
- 17) 以下、この項の事実関係は、表7と表8、8)の①3月31日、8)の③5月28日、8)の④6月16日、8)の⑦9月12日、10)の①12月17日、「大日本婦人聯合會機関誌…」『同』第64号(1頁)、「同」『同』第67号(1頁)、「日誌 三月中」『同』第66号(5頁)、「日誌 五月中」『同』第68号(4頁、5頁)、「日誌 六月中」『同』第69号(2頁)、「日誌 九月中」『同』第72号(2頁)、「日誌 (十月)」『同』第73号(2頁)より引用、参照した。
- 18) 以下、この項の事実関係は、表7と表8、7)の③1月7日、8)の①3月21日、3月22日、8)の⑤7月8日、10)の①12月8日、「日誌 一月中」『同』第64号(2頁)、「新地方委員」『同』第68号(7頁)、「日誌 七月中」『同』第70号(3頁)、「日誌 (十二月)」『同』第75号(3頁)より引用、参照した。
- 19) 以下、この項の事実関係は、表7と表8、7)の④2月5日、8)の①3月31日、8)の⑦9月5日、9月16日、10)の①12月9日、12月17日、12月30日、「新地方委員」第59号(1901年9月10日、7頁)、「日誌 三月中」『同』第66号(5頁)、「院兄の異動」「日誌 四月中」『同』第67号(2頁、4頁)、「日誌 五月中」「摂津三田町 事務員入江大九郎」『同』第68号(4頁、5頁)、「新地方委員」「新賛助員」『同』第71号(7頁)、「日誌 九月中」「新賛助員」『同』第72号(2頁、7頁)、「京都慈善音楽幻燈會報告 出張員大西義一」「新賛助員」『同』第73号(4頁)、「日誌 (十二月)」『同』第75号(3頁)より引用、参照した。
- 20) 以下、この項の事実関係は、表7と表8、より引用、参照した。さらに、2)の①153頁、191頁(なお、153頁11行目の「松場(同年10月以前)が年1回で3円60銭」は誤記で155頁の山口県へ移行、表10の191頁24行目の「日置村地松場 3.600 3.600」も誤記で191頁の山口県へ移行)、7)の④2月25日、8)の⑥8月4日、8月7日、8)の⑧10月16日、10)の①12月10日、12月24日、12月31日、「日誌 二月中」『同』第65号(4頁)、「日誌 八月中」『同』第71号(1頁)、「日誌 (十月)」『同』第73号(3頁)、「来訪者芳名 (十月中)」『同』第74号(4頁)、「慈善函 十二月中」『同』第75号(4頁と5頁の間の欄外)より引用、参照した。

- 21) 以下、この項の事実関係は、表 7 と表 8、8) の① 3 月 15 日、8) の② 4 月 2 日、4 月 4 日、8) の③ 5 月 26 日、8) の⑥ 8 月 13 日、8 月 29 日、8) の⑦ 9 月<sup>(ママ)</sup> 23 日、8) の⑧ 10 月 30 日、8) の⑨ 11 月 27 日、10) の① 12 月 29 日、「日誌 三月中」『同』第 66 号（4 頁）、「日誌 四月中」『同』第 67 号（2 頁）、「日誌 五月中」『同』第 68 号（4 頁）、「日誌 八月中」『同』第 71 号（3 頁）、「日誌 九月中」『同』第 72 号（3 頁）、「院児の異動 十月中」「日誌（十月）」『同』第 73 号（1 頁、3 頁）、「院児の異動 十二月中」「日誌（十二月）」『同』第 75 号（2 頁、4 頁、5 頁）より引用、参照した。
- 22) 以下、この項の事実関係は、表 7 と表 8、7) の③ 1 月 13 日、8) の⑥ 8 月 4 日、8) の⑦ 9 月 11 日、8) の⑧ 10 月 4 日、10 月 20 日、10 月 28 日、10 月 29 日、10) の① 12 月 4 日、「日誌 一月中」「臨時寄付金 一月中」『同』第 64 号（3 頁、6 頁）、「日誌 八月中」『同』第 71 号（1 頁）、「日誌（十月中）」『同』第 73 号（2 頁、3 頁）、「日誌（十二月）」『同』第 75 号（3 頁）より引用、参照した。
- 23) 以下、この項の事実関係は、表 7 と表 8、7) の③ 1 月 21 日、7) の④ 2 月 13 日、8) の③ 5 月 1 日、5 月 5 日、5 月 26 日、5 月 28 日、8) の⑤ 7 月 5 日、7 月 5 日、8) の⑦ 9 月 15 日、10) の① 12 月 22 日、12) の② 106 頁から 112 頁、「日誌 一月中」「新賛助員」『同』第 64 号（3 頁、7 頁）、「日誌 二月中」「臨時寄附金 二月中」『同』第 65 号（4 頁、6 頁）、「日誌 五月中」「臨時寄附金 五月中」『同』第 68 号（3 頁から 6 頁）、「新賛助員」『同』第 69 号（5 頁）、「日誌 七月中」「新賛助員」『同』第 70 号（3 頁、7 頁）、「日誌（十二月中）」「臨時寄附金（十二月中）」『同』第 75 号（4 頁、7 頁）、「明治三十五年自一月至十二月決算報告」『同』第 75 号（1 頁）より引用、参照した。
- 24) 以下、この項の事実関係は、7) の③ 1 月 13 日、7) の④ 2 月 23 日、8) の① 3 月 15 日、8) の⑧ 10 月 15 日、「日誌 一月中」『同』第 64 号（3 頁）、「日誌 三月中」『同』第 66 号（4 頁）、「日誌（十月中）」「京都慈善音楽幻燈會會告」『同』第 73 号（2 頁、4 頁）より引用、参照した。
- 25) 以下、表 9 を含めこの項の事実関係は、「賛助員加盟者人員」『岡山孤児院新報』第 75 号（1903 年 1 月 10 日、8 頁）、「同」『同』第 76 号（同年 2 月 10 日、5 頁）、「同」『同』第 77 号（同年 3 月 10 日、5 頁）、「同」『同』第 78 号（同年 4 月 10 日、6 頁）、「同」『同』第 79 号（同年 5 月 10 日、6 頁）、「同」『同』第 80 号（同年 6 月 10 日、6 頁）、「同」『同』第 81 号（同年 7 月 15 日、6 頁）、「同」『同』第 82 号（同年 8 月 15 日、8 頁）、「同」『同』第 83 号（同年 9 月 15 日、6 頁）、「同」『同』第 84 号（同年 10 月 15 日、7 頁）、「同」『同』第 85 号（同年 11 月 15 日、8 頁）より引用、参照した。

- 26) 表 10 については、『岡山孤児院新報』第 75 号から第 86 号附録をもとに、1903 年 1 月からの各月別各府県別の賛助員の加入人数を捉え直した。その際、本部と地方との差が明瞭になるように配慮した。
- 27) 表 11 については、1903 年の月別の賛助金収収支と全収支に占める割合に注目し、『岡山孤児院新報』第 75 号から第 88 号を紐解き、賛助金収入割合の増減に伴う財政面の動きに着目した。
- 28) 表 12 に関しては、『岡山孤児院新報』第 75 号から第 87 号をもとに、1903 年の本部直接および外部事務員による賛助金の月別集金内容に注目した。その際、本部直接収入と外部事務員により収入とを峻別して整理することで、集金状況の流れや過程を調査することを試みた。
- 29) 表 13 については、『岡山孤児院新報』第 75 号から第 87 号をもとに、1903 年の地方委員による賛助金の月別集金内容に着目し、岡山県と、その他の自治体に大きく分けた上で、北海道から順に、東北地方、関東地方、中部地方、近畿地方、中国地方、四国地方、九州地方、諸外国という形で整理した。
- 30) 表 14 については、菊池義昭「岡山孤児院の音楽幻燈（活動写真）隊の活動と養護実践のかかわり——研究の目的と全体的動向を中心に」『共栄児童福祉研究』第 4 号（1997 年 3 月、101 頁、102 頁）、101-2 を参照した。また、『岡山孤児院新報』第 75 号から第 85 号内の「外部運動」欄を中心に、音楽幻燈隊の活動記録記事を原資料から再度確認し、開催月日、開催地、寄付収入、新賛助員数、新地方委員名などを改めて整理、記述した。
- 31) なお、北海道（南西部）等の巡回が見られた 7 月下旬から 10 月中旬までの間で、岡山孤児院本部では 9 月 25 日に、新渡戸稲造博士が来院していたことも注目され、その概要は『岡山孤児院新報』第 84 号（4 頁）で次のように紹介された。「院内巡回中ペラー師宅に開かれ居たる第六高等学校生徒の聖書研究会に於て一場の感話を述べられたり曰く、キリスト信者は決して弱きものにあらず、真正のクリスチャンは柔和と剛胆とを以て常に戦争的態度を取て世に臨まざるべからず云々。」
- 32) 因みに、岡山孤児院の海外分院の考え方は、当時の『漢城新報』（11 月 25 日）の「社説」に記載され、同記事が『岡山孤児院新報』第 86 号に転載された。転載記事は以下のように記されている。「岡山孤児院の分院を京城に設くべし 岡山孤児院の歴史と成績は何人も称揚して已まざる所なれば、其の院生の一行が我が京城へ来る、必ずや日本人一般の同情を博すべし、余輩も亦院生が行き先光明確実なる独立營業に就くに至らんことを偏に希望して已まざるなり（中略）今日に在ては内地と朝鮮との交通益々頻繁となり、若し京釜鉄道全

通する暁に至ては韓国は全く内地同様の感をなすに至るべければ其の朝鮮館を岡山に建立すると京城に建立すると何等其間に便不便あるべきか、況んや日韓兩國に於ける汽車と汽船は必ずや院生に向けて慈善のため無料にて乗載を承諾すべければ今之を京城に建立するも殆ど岡山本院の構内に建立する者と同様に見放して可なるべし要する処は唯将来孤児をして光明確實なる独立營業に就かしむる其熟れが便に熟れが不便なるを決するにあるのみ是を以て余輩は岡山孤児院に分院を京城に設立せんことを勧告すること爾り」（『岡山孤児院新報』第 86 号、2 頁）。

表 8 1902 年の地方委員による賛助金の月別の集金内容

市町村と地方委員氏名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
岡 山 県	香登村溝手文太郎	9.300	6.100		3.000		3.000				6.200	4.000	31.600
	早島町溝手保太郎					11.400							11.400
	倉敷町大原孫三郎		29.500	1.100	44.500						8.800		83.900
	高梁町伊吹五郎		4.300				11.600	3.700	4.300	3.400	3.300	3.000	33.600
	藤戸村天城津下豊次郎		1.300	1.300	1.300	1.300		2.600		4.200		2.800	17.400
北 海 道	長浜町吹上守屋	4.100											4.100
	落合町山田義信	5.200			2.300	2.300		2.800	1.400		4.100	6.500	26.900
	味野村津谷政治	12.300		5.200				6.600			4.500		28.600
	笠岡町浅野富平	2.500	1.200		20.500	1.900		3.400	2.400	1.300	1.200	1.200	35.600
	邑久郡犬島 *			1.000									1.000
東 北 地 方	有渡村莊三郎吉	7.100							2.800			1.800	11.700
	西川村桑山茂	4.900											4.900
	函館区磯野員為		36.700	37.100					34.600				108.400
	札幌区越智喜三郎		18.500		5.900		18.500	17.100	9.200				69.200
	札幌区峰谷他 2	24.000		22.900									22.900
青 森 市	小樽区峰谷芳太郎				4.100				5.100		3.300		24.000
	岩見沢市内田政雄		4.400		1.400				2.100	2.100		2.100	16.900
	旭川町辻 秀		2.200	3.300	2.500	1.800	4.500						22.000
	旭川町深谷 *				0.700								0.700
	上下方村浅川義一	2.800											2.800
東 北 地 方	青森市川口栄之助	23.200										25.100	48.300
	弘前市石戸谷軍三郎		10.300					3.100	13.200				26.600
	弘前市上藤玖三							45.400					45.400
	藤崎村長谷川英治			10.700							8.700		19.400
	福島町長谷川裕	3.000		2.000		2.000		1.200					8.200







1902 年、1903 年の岡山孤児院の賛助員募集活動と  
全国的な支援ネットワークシステムの展開内容（中畠・菊池）（173） 46

田辺町伊藤貫一 御坊町山本董一		8,000	1,800	2,800	3,400	2,500			3,000	2,000		3,300	16,200 10,600
鳥取市井伊松蔵 米子町岡島太治郎 大森町布施 西郷町加藤 広島市吉見 広島市村田里 広島市日下部愛之助 広島市牧原純一 日置町松場 岩国町小田重喜右衛門 富海村松下頼 長府村釘宮甲太郎 長府村末永頼太郎 山口町河原実雄 赤間関市富海松兵衛 鞆町貫主税 三原町西川玄治 三田尻村木村可一			1,600 5,600 3,600 4,450 1,700 5,500 3,100 8,800 2,200 5,500 3,100 8,800 8,100 12,700		14,500 6,700 1,700 6,100 13,900 3,750 3,750 0,400 2,400 0,800		2,500 3,300 3,000 3,400 1,250 6,500 3,400 6,200 0,600 0,700 3,900	2,000 2,800 2,800 5,400 1,250 2,800 1,250 3,400 6,200 0,700 3,900		3,400 2,900 2,500 2,900 1,250 2,500 1,250 2,900 4,700 0,600		3,000 3,000 8,000 5,300 11,500 1,000 7,300 3,900	14,500 12,100 4,600 1,700 14,800 16,700 37,400 13,300 19,600 20,000 3,100 8,800 3,400 30,100 34,500 1,000 7,300 3,900
川島町佐藤孝助 丸亀市北川孟次 高松市大川茂平 高松市増井嘉吉 讃岐鉄道秋守平八郎 松山市祝田米太郎 松山市田中義弘 新居浜村柿原正一 別子鉱山常喜秀五郎	5,600 2,000 3,300 4,300 2,000		3,400 1,350 2,000 2,800 2,800	2,500 6,900 38,450 2,200 2,800 2,200	3,200 3,600 10,200 2,200 2,800 2,800	6,600 5,500 1,650 3,000 2,400	4,200 16,600 1,600 3,600 3,400	3,000 2,500 3,700 5,000	0,200 1,800 3,900 4,000 2,500	6,800 43,600 42,500 38,450 10,200 6,100 8,350 42,000 37,800	6,800 43,600 42,500 38,450 10,200 6,100 8,350 42,000 37,800		



1902 年、1903 年の岡山孤児院の賛助員募集活動と  
全国的な支援ネットワークシステムの展開内容（中嶋・菊池）（175） 44

[illegible]

〔注〕＊は地方委員以外の人物。味野村津谷政治の11月は溝手保太郎の4.50を含む。  
 (『岡山孤児院新報』第64号から第75号附録より作成)



1902 年、1903 年の岡山孤児院の賛助員募集活動と  
全国的な支援ネットワークシステムの展開内容（中畠・菊池）（177） 42

[illegible]





1902 年、1903 年の岡山孤児院の賛助員募集活動と  
全国的な支援ネットワークシステムの展開内容（中畠・菊池）（179） 40

[illegible]

〈注〉出張員等の欄の市町村は略。『岡山孤兒院新報』第75号から第87号をもとに筆者整理。

表 13 1903 年の地方委員による賛助金の月別の集金内容

市町村と地方委員氏名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計	計(地方)
岡山県	撫川地方委員牧	8,000	1,000	4,100		4,600				4,400			1,000	
	香登地方委員武用						2,500						23,600	
	有漢地方委員莊	6,100					9,000						9,000	
	吹上地方委員守屋	50,000											6,100	
	倉敷地方委員大原				0.900		2,200		1,200		0.900	1,500	56,700	
	玉島地方委員中原	1,000	6,000		0.800					2,600			6,000	
	笠岡地方委員浅野	17,300	1,000	0.800	3,700	1,100	1,300	1,400					26,300	
	高梁地方委員伊吹			1,500		6,200						2,100	8,300	
	早島地方委員溝手				2,000			7,300				2,000	27,300	
	落合地方委員山田			9,800	8,200							5,500	2,000	
北海道	日方地方委員西山												5,500	178,000
	御坊地方委員山本													
	札幌地方委員越智	23,700	21,400		7,100	9,600	12,100	7,000	10,800	6,900	9,400		108,000	
	函館地方委員磯野	23,200							33,800				57,000	
	旭川地方委員辻	1,000	4,420	2,100	3,300	1,400			1,900		1,700	2,000	17,820	
	瀧川地方委員青山					3,000							3,000	
	岩見澤地方委員内田	2,100		1,500			4,700	3,000					11,300	197,120
	福島地方委員長谷川	2,000		3,000	1,000								7,000	
	敦賀地方委員池見				0,600								0,600	
	弘前地方委員石戸谷	6,400	4,500		5,300			6,300				8,700	31,200	
東北地方	金澤地方委員工藤	4,300			4,600								8,900	
	富山地方委員中島		15,000			2,700		2,700	3,300			2,000	30,500	
	富山地方委員服部						2,600						8,300	
	福井地方委員高田	2,700	19,700	7,300	2,500		3,200						15,700	
	高田地方委員荒木	3,700		2,700	2,200	4,500	5,400			5,400	2,100		45,700	147,900





1902 年、1903 年の岡山孤児院の賛助員募集活動と  
全国的な支援ネットワークシステムの展開内容（中畠・菊池）（183） 36

丸亀地方委員北川	5.900	5.200	2.400		3.900	1.700			2.400	16.300
高松地方委員大川					2.000			2.400	1.200	5.200
丸亀地方委員北川	1.500				1.100					7.700
三津浜地方委員斎所			6.000							2.600
讃岐鉄道地方委員秋守										6.000
宇和島地方委員木村										2.100
宇和島地方委員木村										2.100
新居浜地方委員柿原	3.800	6.000	3.800	4.200	4.000	3.200	3.000	7.500	4.100	50.600
別子地方委員常喜	3.900	3.200	4.600		5.000	1.700	2.300	2.300	1.900	31.700
八幡濱地方委員二宮								6.000		8.000
宇和島地方委員木村		4.800		0.400						5.200
高知地方委員村田	10.400		11.400			3.000	4.400			30.200
安藝地方委員野村			4.700					1.200	2.000	7.900
本山人田地方委員島山					8.300					8.300
松山地方委員祝田						2.300				2.300
福園地方委員片山	3.800	5.200	2.800	2.700	5.000			2.300		24.000
若松地方委員宮本		3.000				20.000				23.000
大牟田地方委員鹿毛						1.100				1.100
小倉地方委員柴田		7.500		5.400		21.000			1.600	35.500
中津地方委員野依		3.900								3.900
柳川地方委員笹尾	0.800									0.800
佐賀地方委員西牟田	9.100									9.100
長崎地方委員大島		2.700	2.400		3.900	2.900		25.500	5.100	42.500
都城地方委員大宮	1.800	0.600		1.200	0.600	0.500				1.800
高岡地方委員加世田	1.800					3.500				4.700
國分地方委員鎌田							1.600		2.000	3.500
宮崎地方委員白井		7.900	3.300	1.800	1.600				3.100	27.100
高鍋地方委員濱田	2.600		2.100	1.600				4.100	3.200	13.600
都農地方委員濱田	0.800		0.600	0.500				2.200		4.100
富高地方委員衛藤	3.600							1.100	4.000	8.700

九州地方	延岡地方委員加藤都城地方委員大草川内地方委員樋口熊本地方委員田添熊本地方委員平井八代地方委員白瀬日奈久地方委員松本	5.600	2.600	2.800	2.900	1.300	2.020	1.400	1.200	2.000	2.900	15.620
諸外国	晩香坂 長瀬君山本 韓国京城出張員入江 韓国仁川出張員光延 韓国釜山出張員光延		3.800	7.700	2.900	0.800		2.000	2.800	55.000	7.000	32.160
			3.500							6.000		253.900
			5.200		32.160							100.160

〈注〉『岡山孤児院新報』第75号～第87号をもとに筆者整理。計（地方）は各地方等の欄の合計金額のこと。